名古屋市文化財調査報告34

埋蔵文化財調査報告書26

高 蔵 遺 跡
（第12次～第15次）

1 9 9 7

名古屋市教育委員会

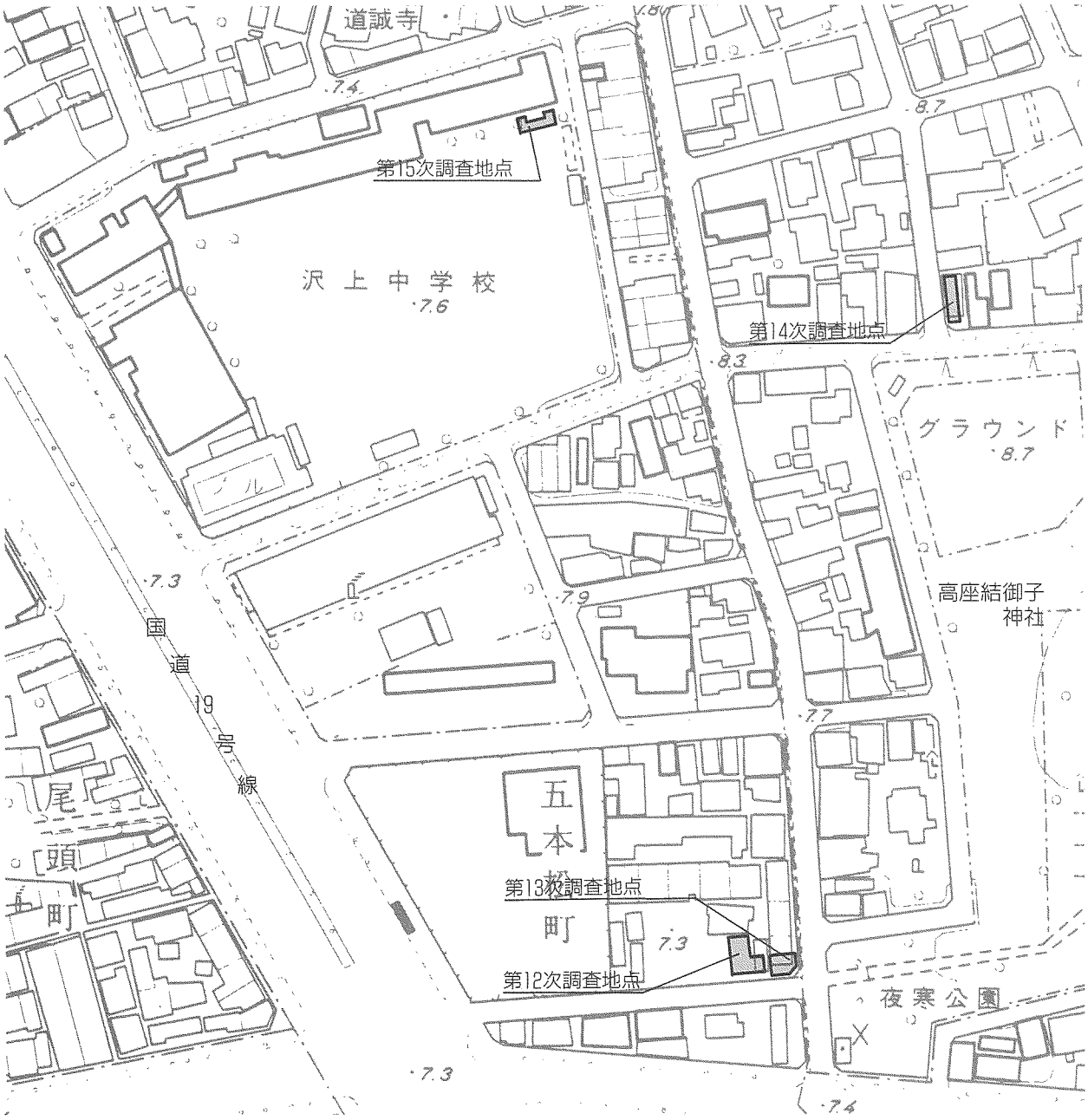
名古屋市文化財調査報告34

埋蔵文化財調査報告書26

高 蔵 遺 跡
（第12次～第15次）

1 9 9 7

名古屋市教育委員会


道誠寺
第15次調査地点
沢上中学校
第14次調査地点
グラウンド
高座結御子
神社
国道19号線
尾頭町
五本松町
第13次調査地点
第12次調査地点
夜寒公園

各調査地点の位置

例　言

1．本書は名古屋市熱田区に所在する高蔵遺跡の第12・13・14・15次発掘調査報告書である。

2．調査は愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに、名古屋市教育委員会が実施した。発掘調査に係わる調整事務は市教育委員会文化財課が、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員が担当した。

3．各次発掘調査の地点、期間、原因、対象面積、担当者は以下の通りである。

第12次発掘調査

調査地点	熱田区五本松町909-3
調査期間	平成８年４月22日～５月31日
調査原因	店舗付住宅建設
調査面積	約240㎡
担 当 者	服部哲也・水野裕之

第13次発掘調査

調査地点	熱田区五本松町909-4
調査期間	平成８年５月13日～６月７日
調査原因	個人住宅建設
調査面積	約190㎡
担 当 者	村木　誠・田原和美

第14次発掘調査

調査地点	熱田区高蔵町５番18号
調査期間	平成８年７月22日～８月９日
調査原因	個人住宅建設
調査面積	約90㎡
担 当 者	野口泰子・山田鉱一・木村有作

第15次発掘調査

調査地点	熱田区五本松町４－４
調査期間	平成８年８月26日～９月20日
調査原因	市立中学校校舎増改築
調査面積	約90㎡
担 当 者	野口泰子・木村有作・山田鉱一

4．本書では、基準高は東京湾平均海水面（T.P.）を、座標系は建設省告示の第Ⅶ座標系を使用した。

5．各次発掘調査の実施および資料整理に際し、下記の方々よりご教示、ご協力をいただいた。記して謝意を表する。(順不同・敬称略)

尾野善裕・金子健一・稲垣美生・近藤和子・佐々木佳子・鈴木弘子・樋上佐知子・山本雅代・若井晴子・脇田朋美

6．出土遺物や調査にあたり作成した実測図・写真類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

7．本書は各次調査担当者の助力を得て、水野裕之（第２章）、木村有作（第４章）、山田鉱一（第５章）、田原和美（第１・３章）が執筆した。編集は田原が担当した。

目　次

第１章　遺跡の位置と概要
Ⅰ．遺跡の位置 …… 3
Ⅱ．周辺の遺跡 …… 3
Ⅲ．調査研究史 …… 4
第２章　第12次発掘調査の概要
Ⅰ．調査の経過 …… 7
Ⅱ．調査の成果 …… 7
Ⅲ．小結 ……16
第３章　第13次発掘調査の概要
Ⅰ．調査の経過 ……21
Ⅱ．調査の成果 ……24
Ⅲ．小結 ……28
第４章　第14次発掘調査の概要
Ⅰ．調査の経過 ……31
Ⅱ．調査の成果 ……31
Ⅲ．小結 ……44
第５章　第15次発掘調査の概要
Ⅰ．調査の経過 ……45
Ⅱ．調査の成果 ……47
Ⅲ．小結 ……55
参考文献一覧……57

表　目　次

表１　調査年表 …… 6
表２　12次調査 SD01遺物表 ……11
表３　12次調査 SD02・04遺物表 ……12
表４　12次調査ピット出土遺物表……15
表５　14次調査 SD２出土弥生土器観察表……42
表６　14次調査 SD２出土石器観察表……42
表７　14次調査 SX１出土弥生土器観察表……42

挿　図　目　次

《第１章》
第１図　遺跡の位置（1:25000）…… 3
第２図　周辺遺跡分布図（1:20000）…… 4
《第２章》
第３図　江戸時代の絵図による調査地点付近…… 7
第４図　江戸時代の絵図による調査地点(推定) … 8
第５図　地籍図による調査地点(推定) …… 8
第６図　調査区西壁・北壁土層断面図 …… 8
第７図　遺構平面図 …… 9
第８図　SD01出土遺物 ……10
第９図　SD02・04エレベーション図 ……12
第10図　SD02・04出土遺物 ……13
第11図　SD03出土遺物 ……14
第12図　P12出土遺物 ……15
第13図　12・13次調査共通遺構(推定) ……16
第14図　古墳周溝と中世埋土溝の分布 ……17
第15図　12・13次集成遺構平面図 ……19・20
《第３章》
第16図　遺構平面図 ……22
第17図　土層断面図 ……23
第18図　SD02出土遺物 ……25
第19図　SD04下位層出土遺物 ……26
第20図　SK01出土遺物 ……27
第21図　SK02出土遺物 ……27
《第４章》
第22図　遺構平面図および土層断面図 ……33
第23図　SD２土器出土状況および土層断面図 ……35
第24図　SX１土器実測図 ……36
第25図　SD２出土遺物実測図　甕……37
第26図　SD２出土遺物実測図　細頸壺 ……38
第27図　SD２出土遺物実測図　広口壺・石器 ……39
第28図　各遺構出土遺物実測図 ……43
《第５章》
第29図　調査地点と周辺の古墳分布図 ……46
第30図　SD05出土遺物 ……48
第31図　遺構平面図 ……49・50
第32図　土層断面図 ……51
第33図　埴輪片 ……53
第34図　P37出土遺物 ……54
第35図　区画整理前後の状況と
「法華堂」等の位置 ……56

第１章　遺跡の位置と概要

Ⅰ．遺跡の位置

高蔵遺跡は、名古屋市熱田区高蔵町を中心に東西約500ｍ、南北約700ｍの範囲にわたって所在している。

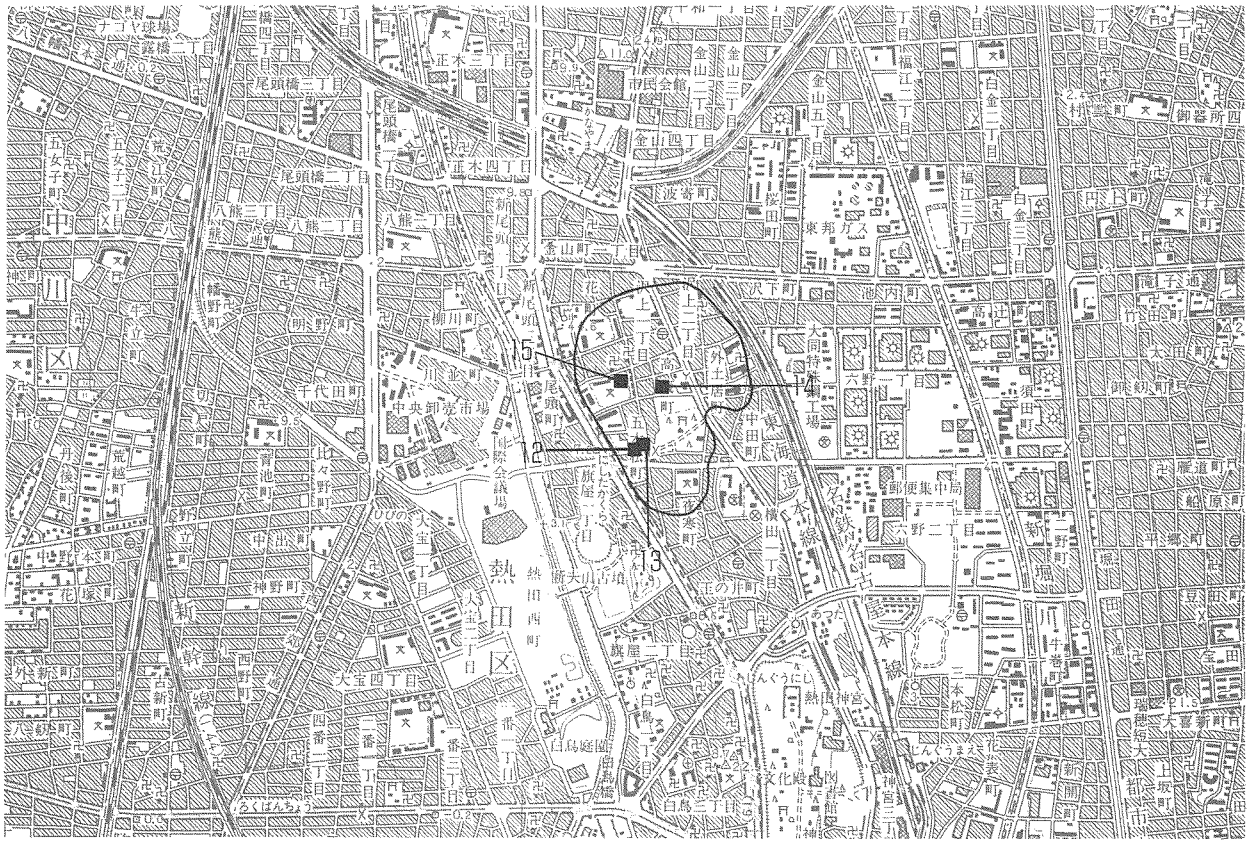
名古屋市の中央部は砂層とシルト層からなる熱田層を基盤とする、標高10～20ｍ程の平坦な洪積台地（名古屋台地）である。この台地は河川等の浸食を受け、那古野・熱田・御器所・瑞穂・笠寺の５つの小台地に区切られている。高蔵遺跡は、そのうちの南西に向かって細長く伸びている、熱田台地上の東側縁に位置している。この台地はいわゆる昔のあゆち潟に半島状に突出していたと考えられ、本遺跡の中心時期である弥生時代には、三方を海に囲まれている状況だったと推定されている。それによれば、高蔵遺跡は入り江に面した立地をしていたことが窺え、他の弥生時代の集落遺跡の多くと立地状況がかなり異なっていることがわかる。

Ⅱ．周辺の遺跡

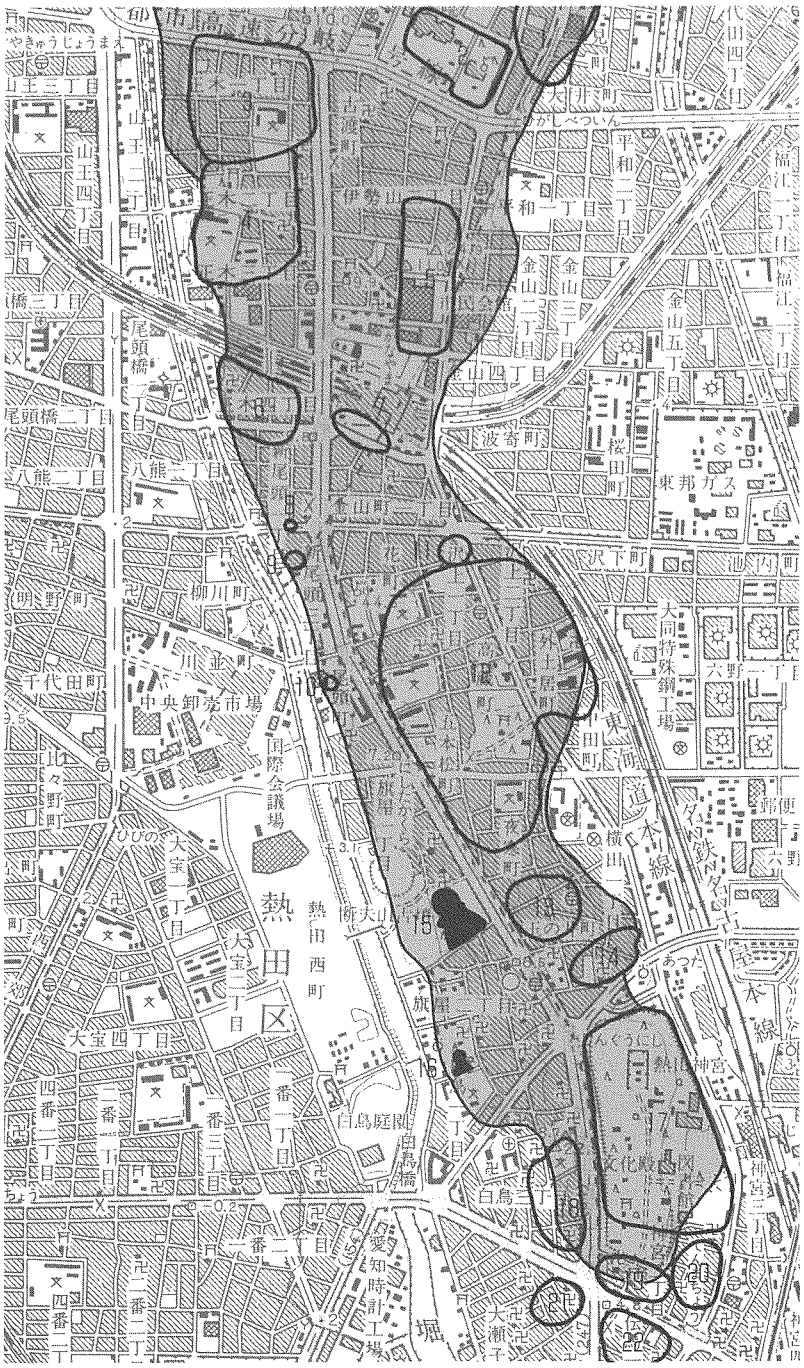
高蔵遺跡の周辺には数多くの遺跡が存在しており、そのほとんどは台地上に位置している。

これらの遺跡は、縄文時代以降の各時期におよぶ複合遺跡である場合が多い。例えば本遺跡の北側では、古沢町（縄文晩期、弥生中・後期、古墳時代）、伊勢山中学校（縄文晩期、弥生後期、古墳時代、古代、中世）、正木町（弥生後期、古墳時代、古代）などの各遺跡があげられる。南方では玉ノ井遺跡（縄文晩期、弥生前・後期、古墳時代、中世）などがその例にあたる。

このあたりでは、古墳も造営されており、東海地方最大級の前方後円墳である断夫山古墳や白鳥古墳、本遺跡内に分布する高蔵古墳群などが知られている。また、北西方向には尾張元興寺跡が、台地南端には



第１図　遺跡の位置（黒印は調査地点、数字は調査次数）　　国土地理院　1:25,000　名古屋南部



第２図　周辺遺跡分布図
（国土地理院　1:20,000）

1　富士見町遺跡
2　古渡城跡
3　正木町遺跡
4　伊勢山中学校遺跡
5　古沢町遺跡
6　尾張元興寺跡
7　東古渡町遺跡
8　住吉神社東遺跡
9　沢観音堂貝塚
10　瓶屋橋遺跡
11　熱田村城
12　高蔵遺跡
13　玉ノ井遺跡
14　森後町遺跡
15　断夫山古墳
16　白鳥古墳
17　熱田神宮内遺跡
18　熱田－Ｃ遺跡
19　熱田神宮南門前貝塚
20　新宮坂遺跡
21　熱田－Ｄ遺跡
22　熱田－Ｂ遺跡

熱田神宮が鎮座しており、このあたりが古くから様々な方向で開発され続けてきたことがわかる。

現在の高蔵遺跡周辺も、住宅・商業地として開発が進んでおり、旧状を残しているのは中心である高蔵公園・高座結御子（たかくらむすびみこ）神社付近のみと思われる。

Ⅲ．調査研究史

高蔵遺跡の最初の報告は1898（明治31）年にさかのぼるが、注目されるのはその10年後である。1907（明治40）年、名古屋市と熱田町の合併による大津通の改修工事の際、土中より貝殻等が多数検出され、翌年、鍵谷徳三郎氏によって調査報告がなされている。「弥生式土器」と石器が同時期に使われていたこと、弥生時代の馬の骨が発見されたことから脚光を浴びた。その後戦前・戦時中は小規模な調査が度々行われており、Ｖ字状の溝状遺構や、弥生前～後期土器・石器、人骨などが見つかっている。

戦後になり、1950年代に入ると南山大学や名古屋大学などによる調査が相次いで行われている。特に、1954（昭和29）年田中稔氏による調査報告は、過去の調査内容を貝層や遺物が集中する10地点毎に整理し、遺跡の範囲と変遷についてまとめているため、以後の本遺跡研究の基本となっている。

1960年～1970年代、高蔵遺跡では発掘調査は行われていない。そのため、高蔵遺跡をめぐる研究も停滞気味になっていた。

しかし、1981（昭和56）年高蔵遺跡調査会による調査を皮切りに、市教育委員会や各調査会の手で頻繁に発掘調査が行われるようになった。これは遺跡周辺の再開発が進み、大規模事業による施設や個人住宅の建設が目立ってきたためである。この後、高蔵遺跡では各機関・団体によって計30数回調査が行われている。最近の成果を一括して概観する事は困難だが、できる範囲で簡単に内容を整理しておきたい。

現在までのところ、高蔵遺跡では縄文時代～近世までの遺構・遺物が検出されているが、縄文時代以前については確実な遺構がほとんど存在せず、遺物も数量が乏しいため、実態は摑めていない。

弥生時代については、遺構・遺物ともに前期から後期まで断続的に認められる。遺物は土器が中心だが、なかでも前期の遠賀川式土器、中期の高蔵式土器、後期の山中式土器に数量的な集中があるようだ。遺構は溝状遺構（溝）が頻繁に検出されているが、集落遺跡として知られているわりに、住居址はこれまでに数軒検出されているに過ぎない。むしろ、環壕かと思われる溝の存在に、集落遺跡とする根拠を置いている傾向がある。このほか、遺跡の西南側では中期～後期の方形周溝墓が近年多数検出されている。1985年～1990年の荒木実氏の調査で16基、1985年の南山大学の調査で１基、市教委の第１・４～６・８次調査で計10数基見つかっている。

古墳時代は、遺構・遺物ともに各時期のものが検出されている。遺構は、花ノ木古墳（５世紀）・高蔵古墳群（６～７世紀）などの遺跡西側に古墳、古墳の周溝が多く存在するのが特徴的である。特に、1987年市教委が実施した試掘および第４・６次調査で検出された埋没古墳は、遺跡内にある後期の古墳群の実態を明らかにする手掛かりとして注目された。この他にも、古墳時代の遺構について1985年以降新知見が増えている。全般的に後期に属する資料が多い中で注目を集めたのは、1985年夜寒地区調査会によって発見された前期の住居址である。住居址自体あまり検出されていない現状では非常に貴重な報告である。この時代の遺物は須恵器と土師器が主だが、遺跡内外の古墳との何らかの関係を表すように円筒埴輪片が比較的多く出土しており、市教委による第７次調査では復元可能な状態で検出されている。

奈良時代以降の状況は良くわかっていない。ただ、遺跡の中心に位置する高座結御子神社の名が「続日本後紀」承和２(835）年の条にあることから、関連する資料の発見の可能性はある。中世・近世についても遺構・遺物の検出例が増えている。遺構は部分的な検出が多いため不明な点が多い。遺物は日常生活に密着している雑器や瓦片などが大半を占めるが、鋳物業が行われていたことを示すものなど、産業に関わる資料も見つかっている。

このように概観してみると、いずれの時期も部分的な解釈と推察しかできていないことがわかる。これは、様々な事由から小規模な調査しか行えなかったために、全体の把握が困難なことによる。最近では、太平洋戦争時の施設なども遺構として扱うこともあり、それこそ縄文時代以来連綿と続く集落地として、当遺跡の調査研究は非常に意味のあるものになると思われる。だが、総合的な視野でそれを行うには、まだ多くの調査事例の積み重ねが必要というのが現状である。

調査年	調査地	調査者	所見	現状	文献
1908	大津通	鍵谷徳三郎	貝塚、弥生土器、石器、馬骨		鍵谷1908
1913		井上(旗屋小校長)	弥生土器、人骨		
1916		安藤清次郎	弥生土器、人骨		
1917		徳川義親			
1917		佐藤亀一			佐藤1918
1919		小金井良精・柴田常恵	溝、弥生土器		
1919		清野謙次	貝塚、弥生土器		清野1925
1927	外土居町	直良信夫	貝塚		
1928	熱田東町(旧町名)	小栗鐵次郎・伊藤文四郎	貝塚、弥生土器		
1940	高蔵町60	鈴木範一	弥生土器		田中1954
1941		酒詰仲男	溝、縄文土器、弥生土器		酒詰1967
1942		高橋儀一	竪穴、弥生土器		田中1954
1946		紅村弘			
1951	外土居町12(E地点)	田中稔	溝、貝層、弥生土器	会社建物	田中1954
1951	外土居町	澄田正一	溝、貝層、弥生土器		澄田1955
1953	高蔵町62(D地点)	中山英司	溝、貝層、弥生土器	高層マンション	伊藤1979
1954	高蔵1号墳	楢崎彰一	古墳(横穴式石室)	滅失	楢崎1955
1956	D地点	稲垣晋也	溝、弥生土器、人骨	高層マンション	南山1985
1981	高蔵町1001-2	高蔵遺跡調査会(会長伊藤秋男)	住居跡、弥生～近世陶器	高層マンション	南山1982
1981	高蔵町9－7	第1次調査	溝、周溝墓、弥生土器	高蔵保育園園舎	見晴1982
1982	夜寒町70	第2次調査	溝、弥生土器、須恵器	民家	見晴1983
1985	夜寒町204	夜寒地区調査会(代表重松和男)	溝、周溝墓、住居跡、弥生土器、土師器	民家	南山1985
1985	五本松町11	荒木実(第1次調査)	周溝墓、弥生土器、中世陶器	高層マンション	荒木1986
1986	五本松町11	荒木実(第2次調査)	周溝墓	第1次調査に同じ	荒木1987
1987	五本松町11	荒木実(第3次調査)	弥生土器、中世陶器	第1次調査に同じ	荒木1987
1987	夜寒町102	夜寒町遺跡調査会(荒木実他)	周溝墓、溝	会社建物	夜寒1988
1987	五本松町1002	第3次調査	中世遺構、中世陶器、瓦	会社建物	見晴1988
1987	沢上二丁目509	(試掘)	溝、弥生土器	空き地	
1988	沢上二丁目501	荒木実	住居跡、弥生土器、土師器	駐車場	荒木1989
1988	外土居町1－21	(立合調査)	溝、弥生土器	会社建物	
1989	五本松町901	第4次調査	古墳、土師器、須恵器、中世陶器	スポーツ施設	見晴1990
1989	五本松町11	荒木実(第4次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
1990	五本松町11	荒木実(第5次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
1990	五本松町11	荒木実(第6次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
1990	五本松町11	荒木実(第7次調査)	周溝墓、弥生土器	第1次調査に同じ	荒木1991
1991	外土居町7－36	(立合調査)	溝、弥生土器、貝層	会社建物	
1993	花町6-15	高蔵遺跡(花町地区)調査会(中嶋理恵)	溝、谷、弥生土器、須恵器	高層マンション	花町1994
1993	沢上二丁目704	第5次調査	溝、弥生土器	コミュニティーセンター	見晴1994
1993	高蔵町510	(立合調査)	溝	店舗付共同住宅	
1994	五本松町7-20,30	第6次調査	周溝墓、古墳、弥生土器、須恵器	NTT	見晴1995a
1994	高蔵町6-10	第7次調査	溝、埴輪、須恵器	個人住宅	見晴1995b
1994	高蔵町203	(立合調査)	溝	個人住宅	
1994	高蔵町1-17	第8次調査	溝、弥生土器、須恵器	個人住宅	見晴1996a
1995	沢上二丁目4-12	第9次調査	土坑、弥生土器、須恵器	個人住宅	見晴1996a
1995	五本松町・夜寒町	第10次調査	溝、山茶碗、中世陶器	道路	見晴1996b
1995	外土居町	第11次調査	弥生土器、須恵器	道路	見晴1996c
1995	夜寒町12	(立合調査)	灰釉陶器	道路(ガス管工事)	
1996	高蔵町601	(立合調査)	溝？	個人住宅	
1996	五本松町909-3	第12次調査	溝、山茶碗、中世陶器	店舗付共同住宅	本書
1996	五本松町909-4	第13次調査	溝、須恵器、山茶碗、近世陶器	個人住宅	本書
1996	高蔵町5-18	第14次調査	溝、弥生土器、古代須恵器、山茶碗	個人住宅	本書
1996	五本松町4-4	第15次調査	溝、須恵器、土師器	学校校舎	本書

表1　調査年表

調査者名を特に記さないものは市教育委員会による調査である。
文献は巻末の主要参考文献を参照。

第２章　第12次発掘調査の概要

Ⅰ．調査の経過

調査地点付近は、宅地や商業地となっているところで、本件の調査は、集合住宅の建築計画に伴う事前調査である。対象面積は、約240㎡であった。

平成８年４月15日と17日に開発事業者による表土剝ぎ作業を立合い、４月22日から作業員をいれて発掘調査を開始した。調査は、排土の処分が調査区内に積み置くということであったために、北側と南側の半分ずつの折り返し調査となった。そして、５月23日に現地の発掘調査作業を終了した。

遺構の記録は、平板測量による平面図を作成し、土層図のほか写真による記録を適宜行った。なお、調査成果の現地説明会は、敷地等の関係から実施しなかった。

また、同年５月13日から今回の第12次調査地点の東側に隣接して住宅建築に伴う第13次調査が一部並行して行われた。

Ⅱ．調査の成果

１　基本土層

当調査地点の基本的土層堆積は、調査区西壁面の観察による。現地表から約30cmまでが表土層（近・現代）で、その下に約10cmの厚さで淡茶褐色の砂質土（中世陶器を含む）、さらにその下約30cmの厚さで茶褐色の砂質土（中世陶器を含む）が堆積し、以下は基盤層の黄橙色土（熱田層）である。

遺構埋土は、基本的に熱田層直上の包含層と同質であった。

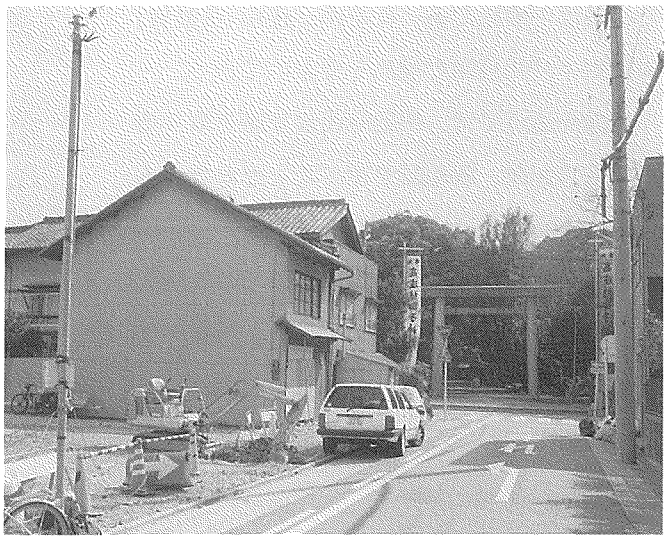
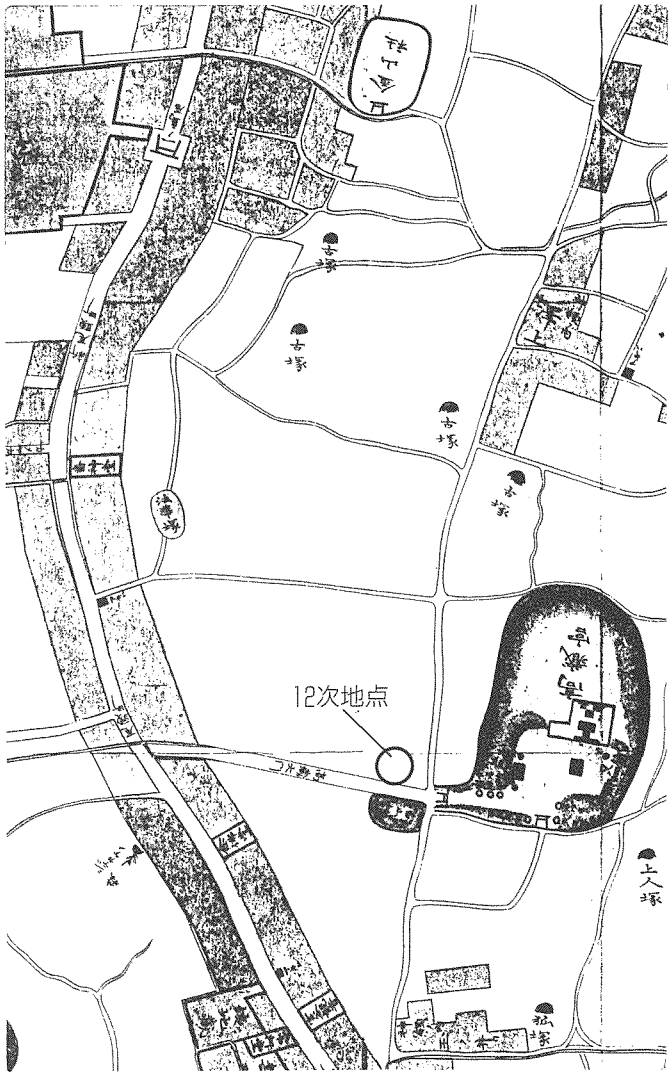


写真１　調査地点（左手前の空地）



第３図　江戸時代の絵図（註１）による調査地点付近

2　遺構の概要

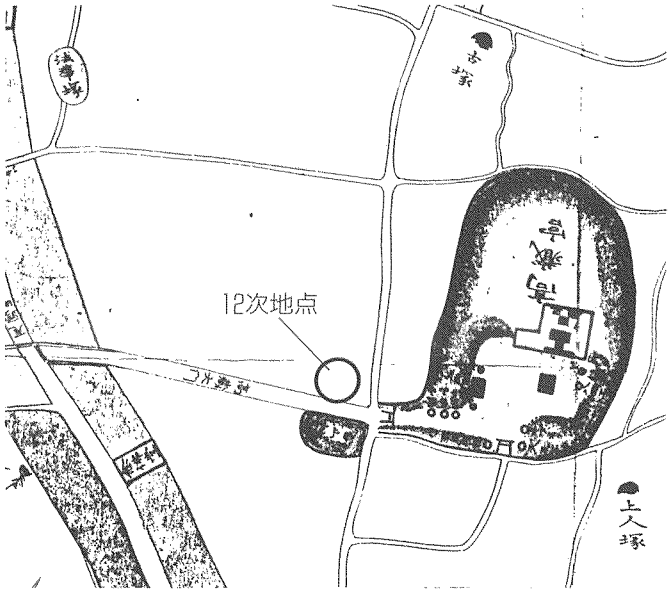
今回検出された主な遺構は、包含層中の面では確認が困難であったため、地山(基盤層)面まで下げた段階で検出したものである。

当調査地点では、明治時代に家屋を取り壊した際の瓦礫、陶磁器を捨てたと思われる大規模な土坑（SX01）や、付近に建っている民家に使用された土管埋設溝など若干の近現代の穴があったため、一部の遺構は、攪乱を受けていた。

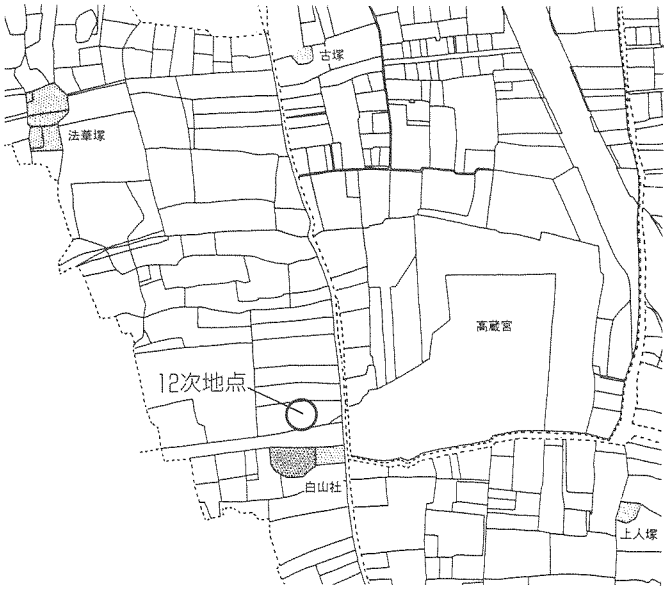
検出遺構は、大型で溝状を呈するものが大部分を占めた他、ピット、小型の土坑が検出された。ほとんどの遺構が中世および古墳時代までの遺構であった。

なお、歴史的に記録された調査地点付近の史料のうち、江戸時代につくられた「熱田」絵図（註１）によると発掘調査位置は、高座結御子神社（「高蔵宮」）の西の鳥居から延びる参道に面しており、鳥居前の「白山社」の北側にあたると思われる（第４図）。

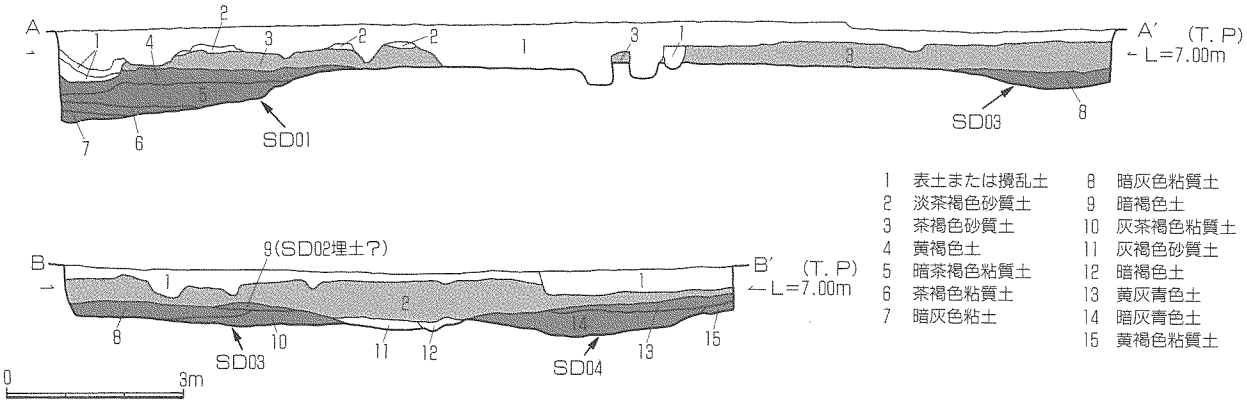
この「白山社」については、明治時代の地籍図に示された土地の形状や、古地図からの位置関係などから古墳の可能性に言及されていることもあって(註２)、今回の調査でもどのような遺構が検出されるのか期待されたところであった。



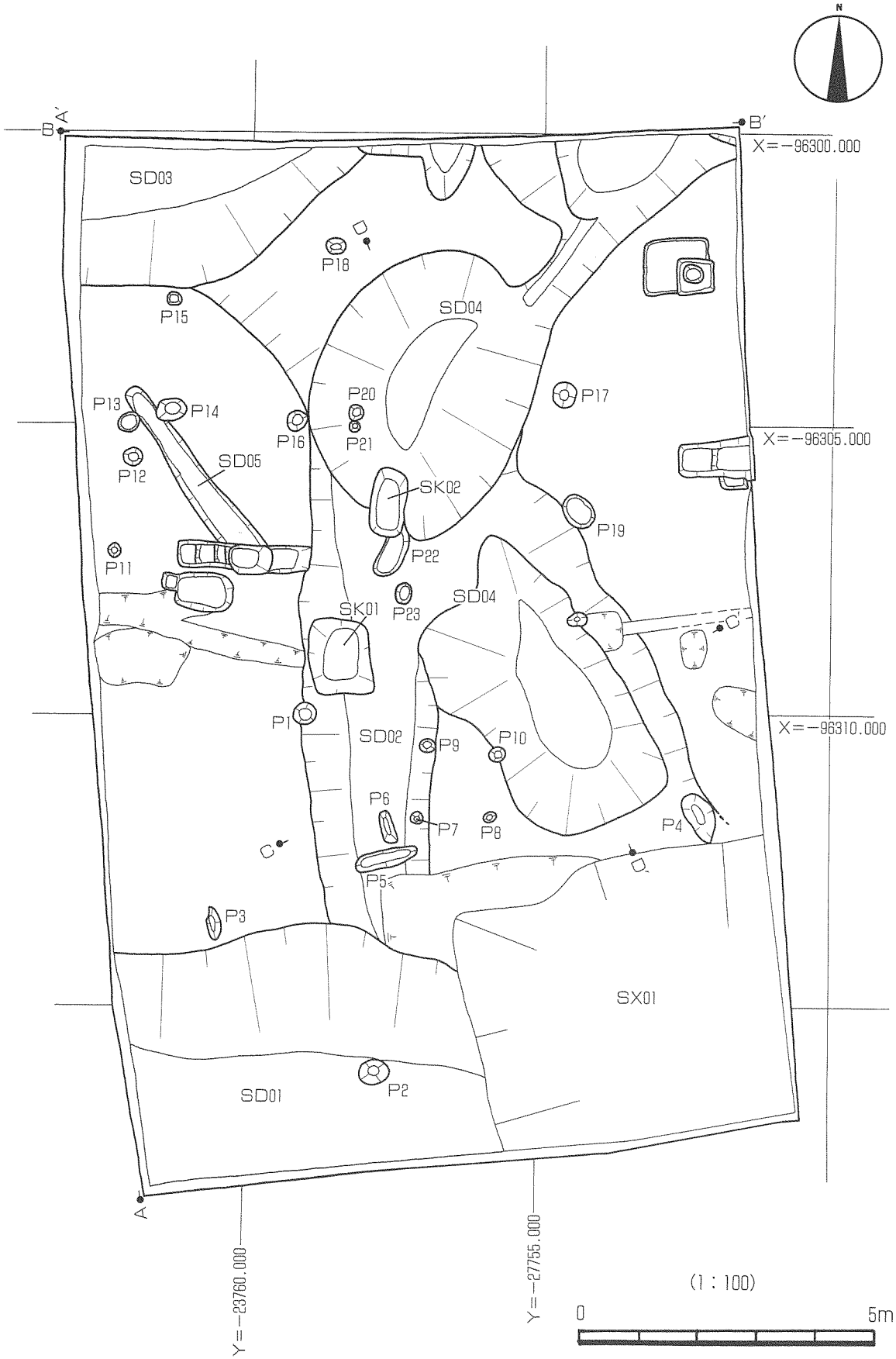
第４図　江戸時代の絵図(註１)による調査地点（推定）



第５図　地籍図による調査地点（推定）
［註２文献の掲載図により作成］



第６図　12次調査区西壁(A-A′)・北壁(B-B′)土層断面図



第７図　12次調査区遺構平面図

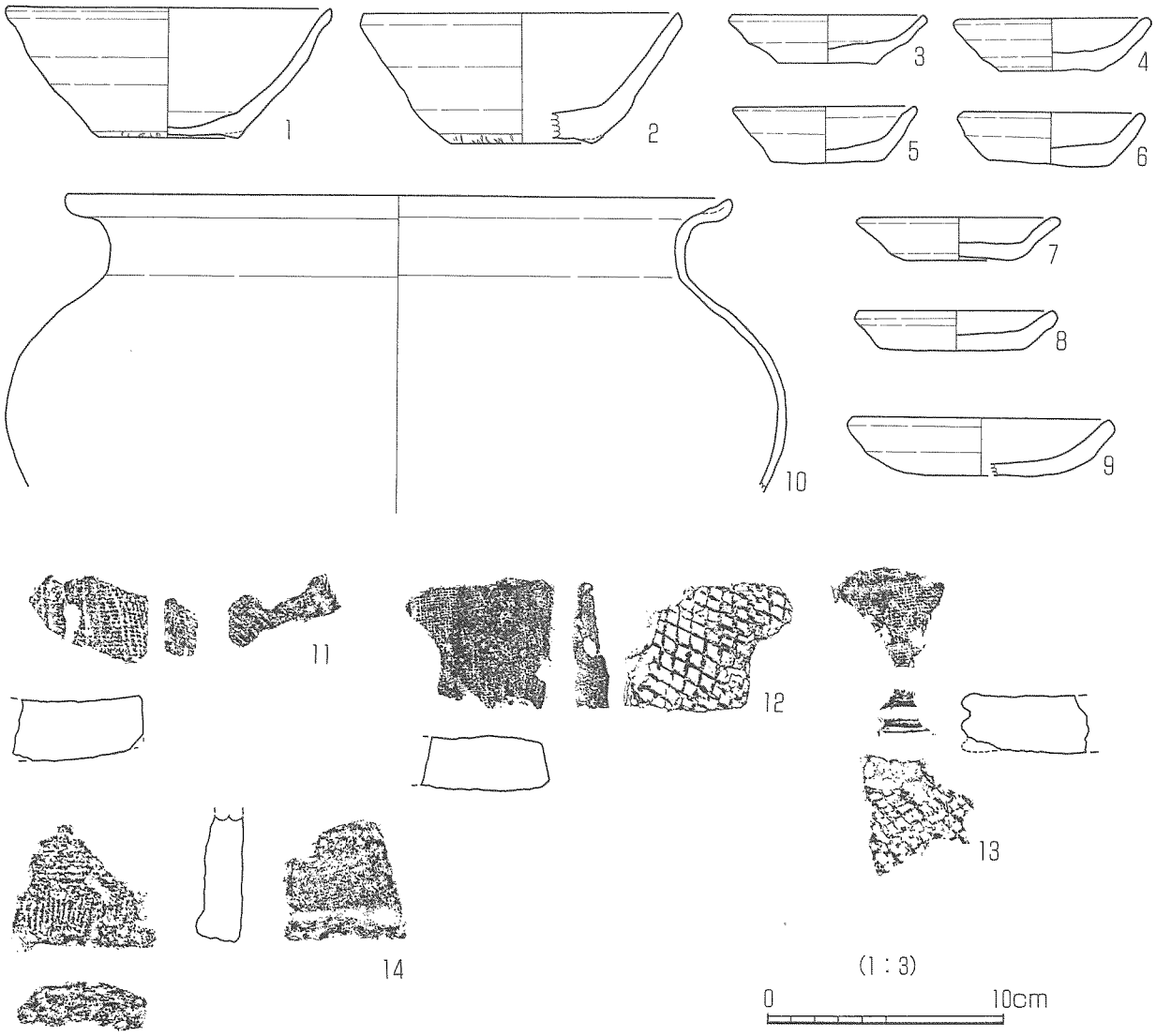
(1)　SD01

調査区の南端で検出された溝の一部と思われる遺構であるが、形状、規模などは不明である。

検出遺構が溝であるとすると土層断面から推定される溝の幅は、６ｍを越える規模である。深さは、現状では約１ｍである。先にふれた地籍図などから古墳の可能性をみると、位置的には「白山社」付近を溝状に巡る周溝の一部と言えるかもしれない。

遺構の埋土は、地山上面レベルで整地した

写真２　SD01の埋土



第８図　SD01出土遺物

ように地山ブロック土を多量に含む土層で覆われていた。この層より上位の包含層と下位の埋土からは、中世陶器片が出土している。

遺物は、古代から中世の瓦、山茶碗などの中世陶器片や鉄滓が大多数を占めるが、埴輪、須恵器片もわずかではあるが検出された。

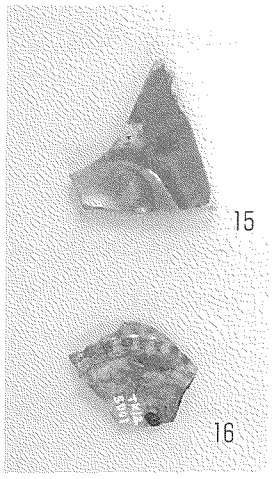


写真3　SD01出土遺物

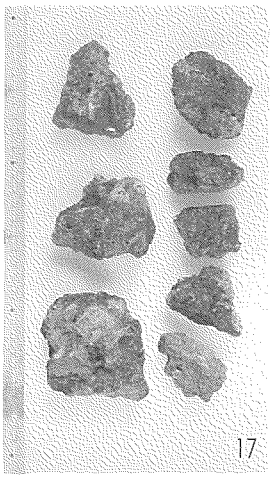


写真4　SD01出土遺物

(2)　SD02・04

調査区のほぼ中央部分を南北に延びる幅4～5mの溝状遺構が検出され、当初これをSD02としたが、埋土のレベルが下がるうちにSD04とした状況のように土坑状の部分が連なるような状態で検出され、SD02は、遺構西側で南北方向の溝状となっていた。埋土の質(茶灰色土）が区別できず切りあい関係が検出できなかったことで埋土の上位では両方の遺物が混入した。遺物の扱いはSD02、04を含めて報告する。なお、遺物からは、SD02部分で16世紀代と思われる擂鉢片などが含まれており、SD02がSD04を切っていたと判断された。また、SD02・04とSD01、SD03との切りあい関係も不明確であった。

SD04は、調査区東壁寄りの地盤部分を囲むように構築されていて、東側に続いていくよ

表2　SD01遺物表（第8図、写真3・4）

番号	器　　種	時　　期	備　　考
1	尾張系山茶碗	13C前葉	猿投窯第Ⅷ期第1型式（註3）
2	〃	〃	〃
3	〃　（小皿）	12C後葉	猿投窯第Ⅶ期第3型式
4	〃　〃	〃	〃
5	〃　〃	〃	〃
6	〃　〃	〃	〃
7	〃　〃	〃	〃
8	〃　〃	13C前葉	猿投窯第Ⅷ期第1型式
9	土師質皿		非ロクロ
10	伊勢型土鍋	13C中頃	
11	平　瓦	古　代	凸面ナデ消し
12	〃	〃	凸面格子タタキ
13	軒平瓦	〃	重弧文、凸面格子タタキ
14	埴　輪		土師質表面風化
15	青磁碗	12C後半～13C	龍泉窯系
16	白磁合子(身)	〃	
17	鉄滓など		炉体の一部？を含む

写真5　SD02・04の埋土

写真6　SD02・04

うであったが、たまたま当調査区の東に隣接する部分が13次調査区として発掘調査が行われ、続きの部分と思われる遺構の一部が検出された。

土坑状の部分は、長径約４ｍ、短径約２～３ｍの楕円形を呈し、土坑と土坑の間は、幅約１ｍほどの土橋状になっている。一定の間隔で同規模の土坑が造られた状態であるが、遺物が土坑状の部分に集中するということは無く、破片が散在した状況であった。

表３　SD02・04遺物表（第９図、写真７・８）

番号	器　　種	時　　期	備　　考
1	山茶碗	12Ｃ後葉	猿投窯第Ⅶ期第３型式
2	〃	13Ｃ前葉	猿投窯第Ⅷ期第１型式
3	〃	12Ｃ後葉	猿投窯第Ⅶ期第３型式
4	〃　(小皿)	13Ｃ前葉	猿投窯第Ⅷ期第１型式
5	土師質羽釜	15Ｃ	SD02出土
6	〃	〃	〃
7	灰釉陶器碗	10Ｃ	猿投窯折戸53号窯式
8	山茶碗(鉢)	13Ｃ	
9	ふいご羽口		
10	須恵器甑	７Ｃか	
11	平　瓦	中世？	凹面と端面に糸切痕
12	〃	〃	砂粒多い軟質
13	〃	古　代	凸面平行タタキ
14	丸　瓦	〃	凸面縄タタキ
15	〃	〃	〃
16	埴　輪	5Ｃ後半～6Ｃ前	須恵質、二次被熱
17	〃	〃	〃
18	白磁碗	12Ｃ後半～13Ｃか	端反り碗
19	青白磁瓶子	13Ｃか	唐草文
20	青磁碗	13Ｃ	龍泉窯系、鎬蓮弁文
21	鉄滓など		炉体の一部？を含む

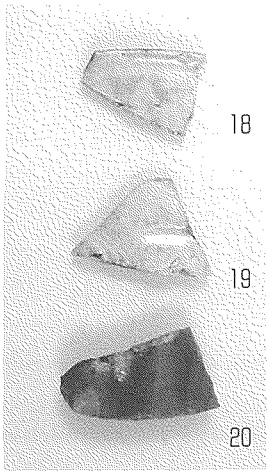
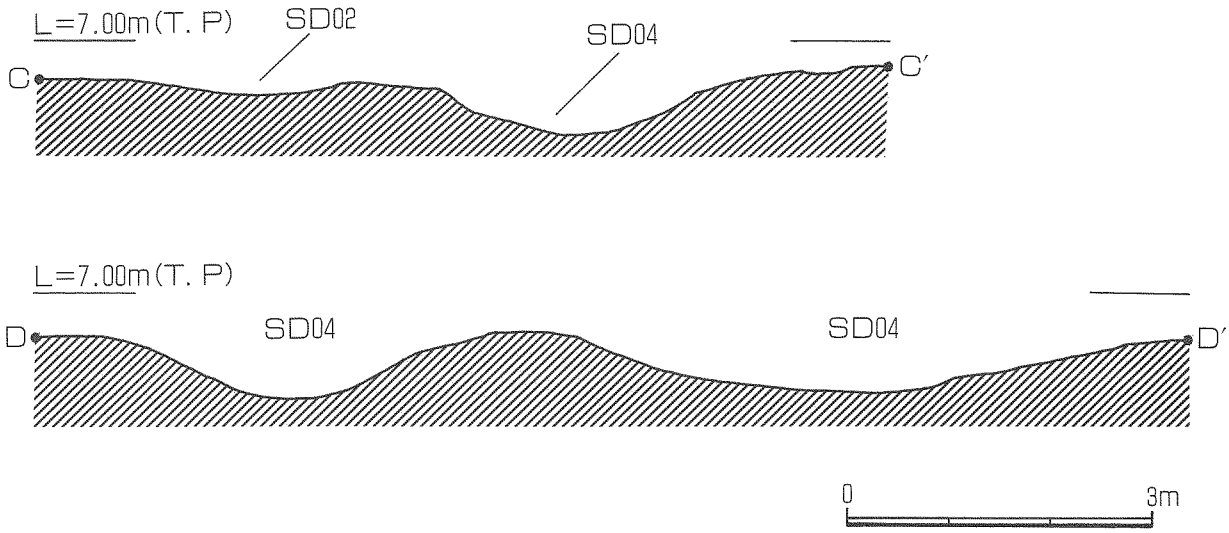
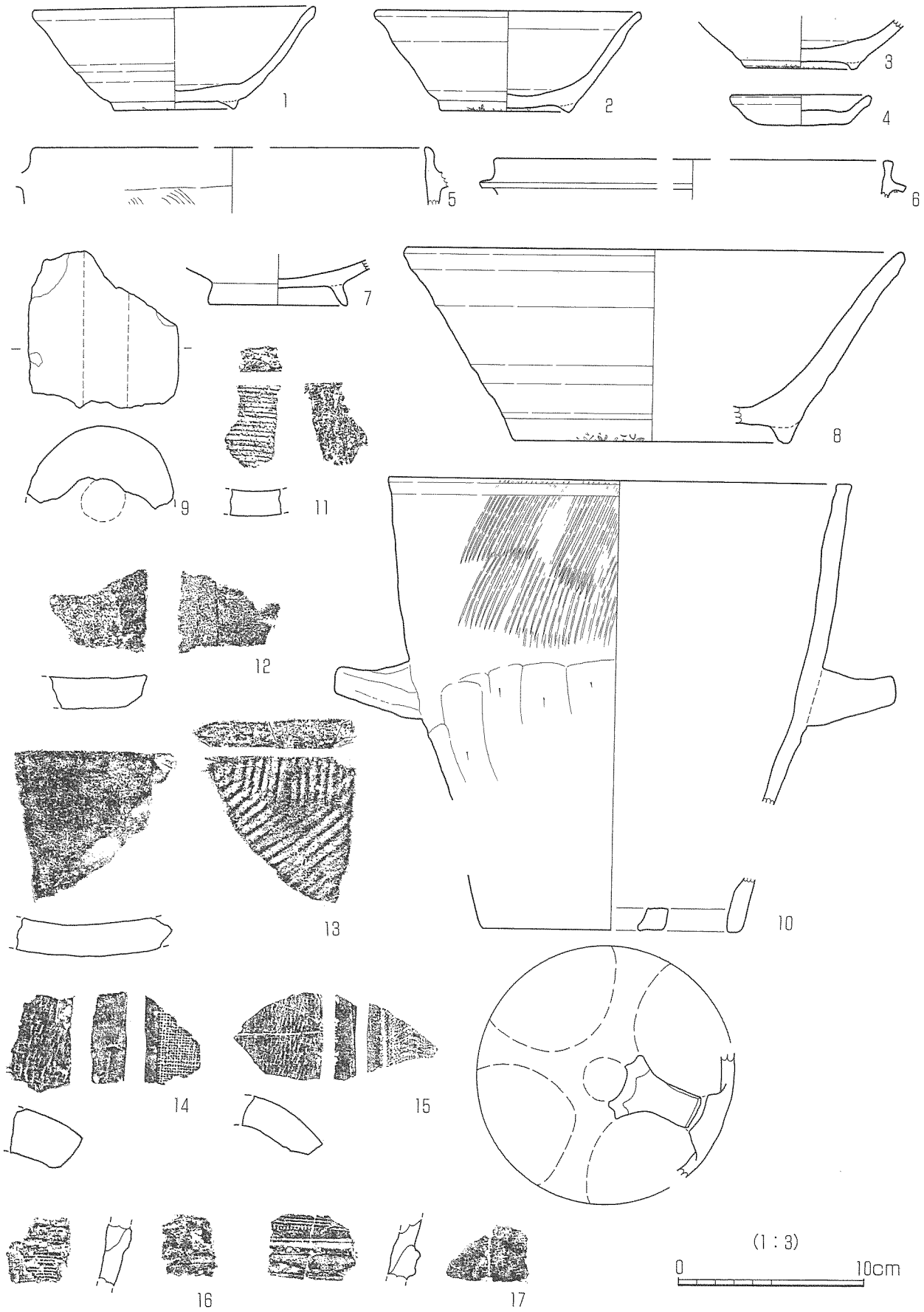


写真７　SD02・04出土遺物

写真８　SD02・04出土遺物



第９図　SD02・04エレベーション図



第10図　SD02・04出土遺物

(3) SD03

調査区北西隅で検出された遺構の一部で、外郭が緩やかな弧状を描く比較的浅い掘り込みである。埋土は、暗灰色から灰茶褐色の粘質土である。

出土遺物図の1は、須恵器坏蓋で猿投窯東山44号窯期頃の製品と思われる。2は、土師質の埴輪で、全体に風化がひどく器表面の調整痕は不明である。3は、尾張系の山茶碗で猿投窯第Ⅶ期第3型式に相当されよう。遺物には、他に土師器の甕破片などがある。

当遺構も、全体の形状が分らないため性格を知る判断材料に乏しいが、埋土の時期は中世の時期と思われる。しかしながら、埴輪片など古墳時代の遺物が比較的多く混入している状況は、付近に該期の遺構が存在したことを示している。

(4) SK01

SD02と重なる位置で検出された1.3m×1.1m、深さ約40cmの土坑である。埋土は、地山ブロックを多く含み、当遺構の上にSD02埋土が乗っていた。

遺物は、小破片が少量であったが、13～14世紀の山茶碗、14～15世紀頃と思われる瀬戸灰釉碗、皿片などであった。

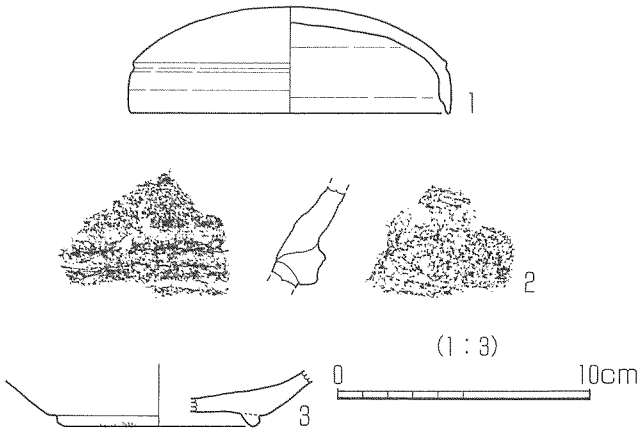
(5) ピット

当調査区で検出したピットは24基(SK02を含む)であった。そのうち遺物が検出されたものは12基あり、P2、8、12以外は小破片の中世陶器類が含まれ、他の遺物が出土しなかったピットも埋土の状況から、中世に所属するものが多いと思われる。

P7～10の方形部分を含め建物の存在が想定されるが、形状は明確にできない。

P12からは、須恵器提瓶がほぼ完器で単独に出土した。猿投窯東山44号窯期頃の製品と思

写真9　SD03



第11図　SD03出土遺物

写真10　SK01

写真11　検出ピットの一部

われ、時期は7世紀前半頃に推定される（註4）。

表4　ピット出土遺物表

遺構名	出　土　遺　物	時　期
P1	山茶碗、瀬戸灰釉、土師質羽釜	14C～15C
P2	須恵器、鉄片	
P3	山茶碗(小皿)	13C
P4	山茶碗	13Cか
P5	土師質羽釜	15C
P8	土師器	
P12	須恵器(提瓶)	7C前半
P16	山茶碗	14Cか
P20	常滑甕	
P22	山茶碗	13Cか
P23	〃	〃
SK02	山茶碗、釘状鉄片	〃

(6)　SX01

調査区の南東隅部分で検出された明治時代の廃棄土坑である。調査においては、重機および車両の出入口であったために完掘することができなかった。

出土遺物によると明治中頃（註5）の民家等から出た廃棄物と思われる。

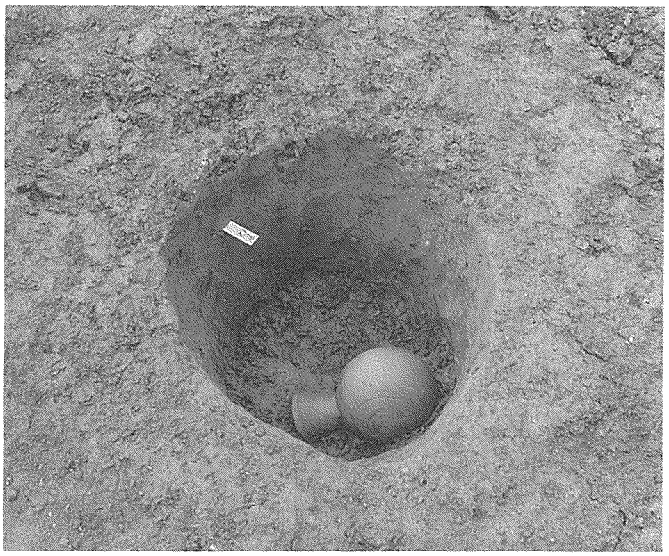
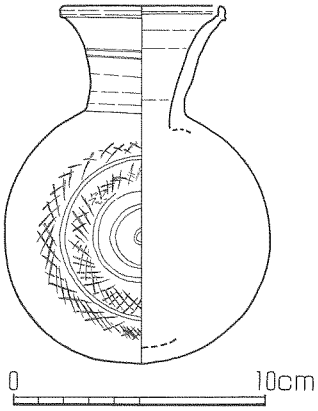


写真12　P12遺物出土状況



第12図　P12出土遺物

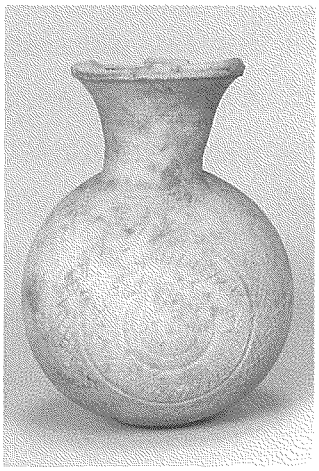


写真13　P12出土遺物

写真14　SX01出土遺物

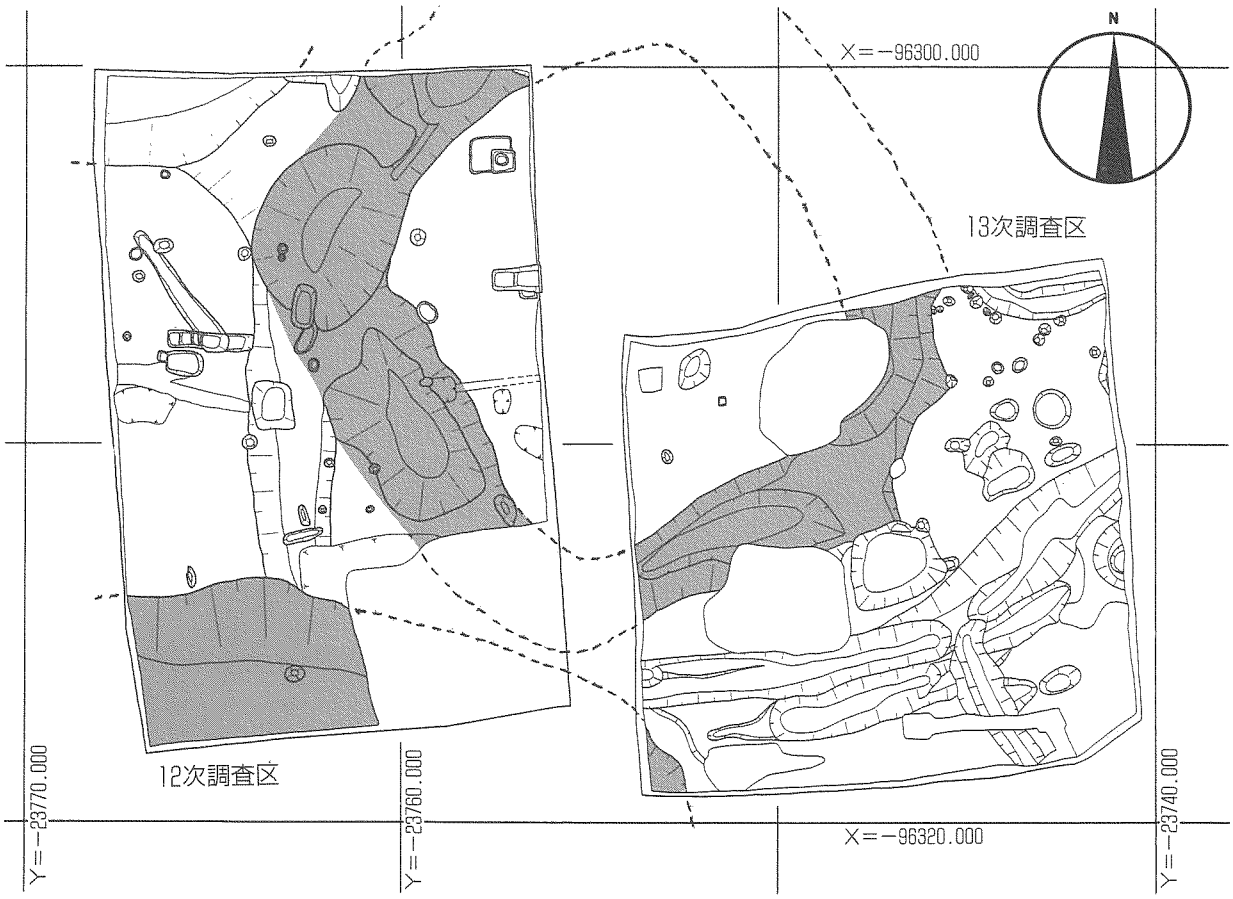
Ⅲ．小　結

今回の調査は、調査面積が約240㎡であり、主な遺構はそれぞれの一部分を検出したにとどまった。しかしながら、当地点付近では、これまで数箇所で発掘調査を行っており、そのうち遺物と遺構の様相が当地点と類似する状況があり、それらの遺構との関連について示したい。

当地点（12次調査）のSD01、SD04の埋土からは山茶碗、瓦、鉄滓などと若干の須恵器、埴輪片が出土し、13世紀代に埋まった状況であった。中世陶器、瓦などの遺物を含む埋土で外郭が弧状を呈する遺構は、3次調査のSK01があり、ここでは、円筒埴輪片が10点あまり出土している。また、4次調査のSD01は、埴輪、須恵器の出土した古墳周溝であるが、この埋土上層では、中世の遺構（SK09）が検出され、山茶碗や鉄滓、鋳型片が出土している。

4次、6次調査では、それまで未確認であった円形墳や方形墳の周溝が検出されている（第14図では方形周溝墓を省いた）。そのなかで、6次調査の古墳周溝（SD13、17）で囲まれた部分では、当時残存していた墳丘を意識して区画したと思われる溝が13世紀（SD14、16）と15世紀（SD15）の時期に構築されていた。当地域が、後期古墳群という在来の祖先を意識しながら、規模の大小はあるものの、中世のある時期に、まだある程度存在していた墳丘部の周囲の溝（古墳周溝）をさらえ直したり、部分的に掘削を加えるという造作がおこなわれたとすれば、12次調査のSD01、04や3次調査のSK01も本来は、古墳周溝部分であったと考えることも可能であろう。

それでは、中世にこの付近がどのような場所であったのか。これらの埋土から出土する遺物が山茶碗を



第13図　12・13次調査地点に共通する遺構の推定（1/200）

主体としながらも、工房を思わせる鉄滓、寺社に関わる古代、中世の瓦(註６)、埋納容器としての事例が多い白磁合子、青白磁瓶子片などが要素としてあり、これらの結び付きが古墳群とどのように関連した事象であったのか、にわかに説明できず課題としておきたいが、当時、熱田の地で活躍したであろう中世の宮鍛冶や鋳物師たちと、遺跡の北方に位置する金物鍛冶の神である金山社ともあわせて考えるべきであろう。

註

1　名古屋市蓬左文庫所蔵　『尾張誌付図「熱田」』　天保年間（1830～44）による。

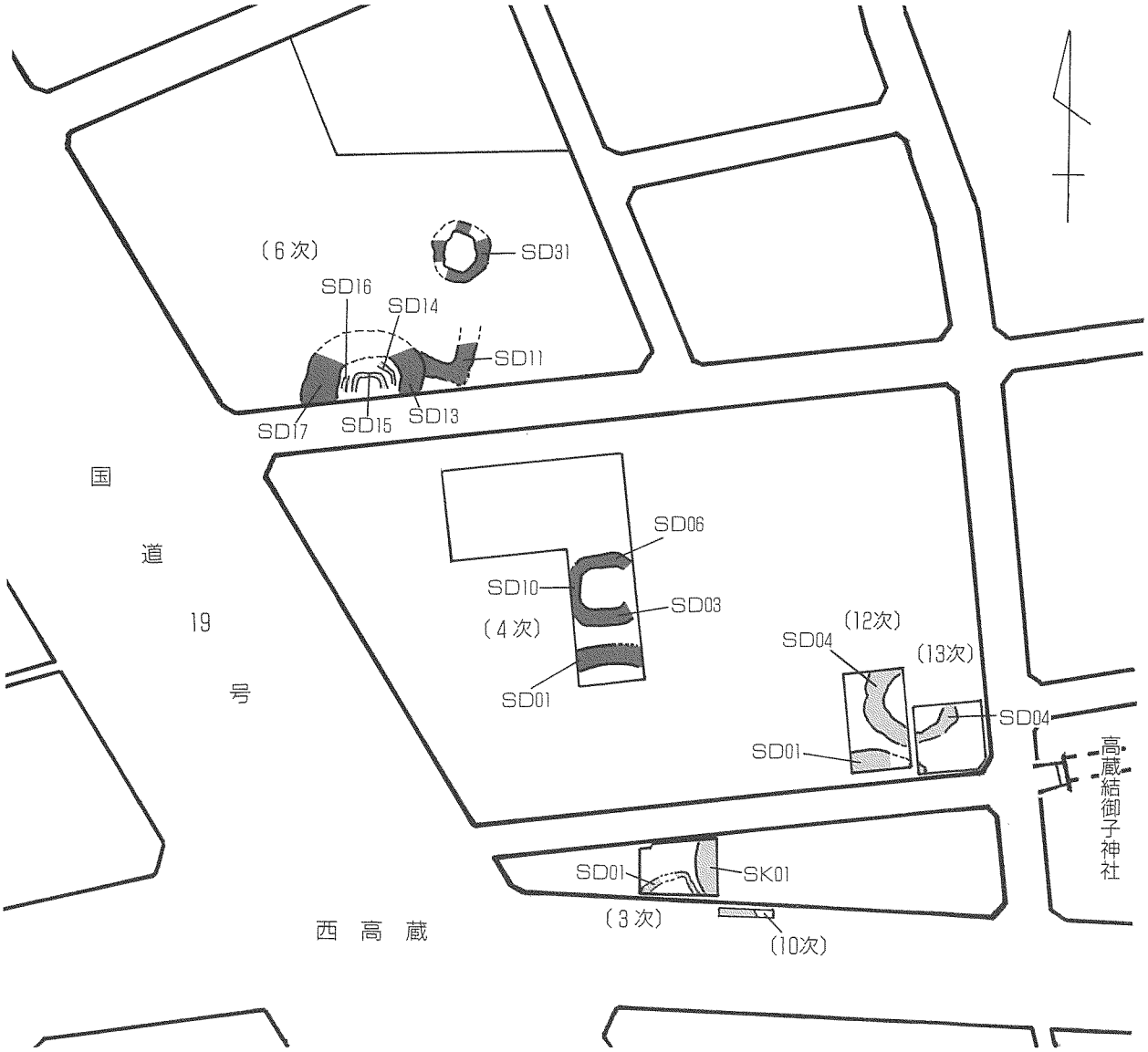
2　竹内宇哲　『高蔵遺跡　第４次調査の概要』　1990　名古屋市教育委員会による。

3　斎藤孝正　「中世猿投窯の研究―編年に関する一考察―」『名古屋大学文学部研究論集』C Ⅰ(史学34)　1988　名古屋大学による。

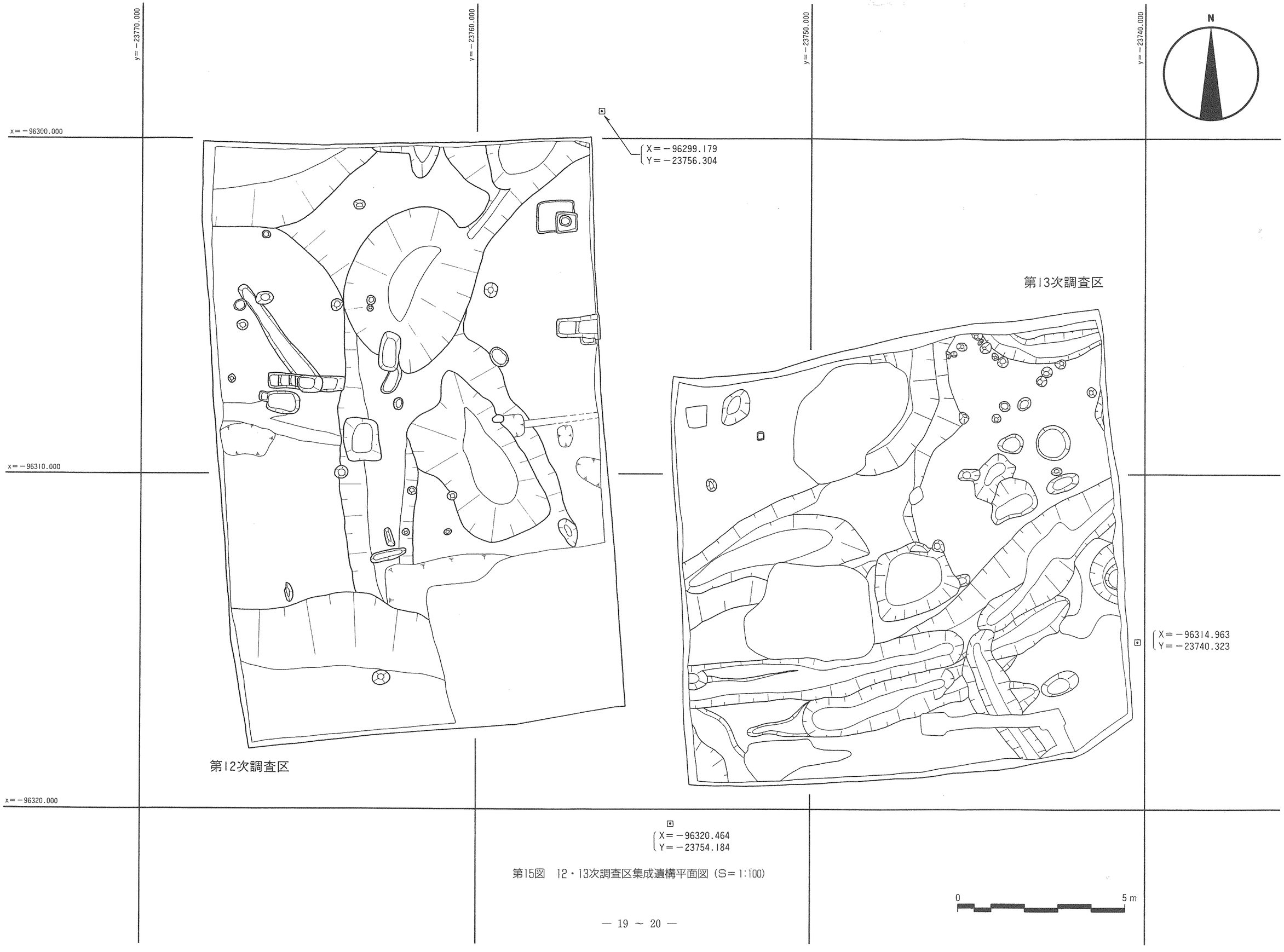
4　尾野善裕（京都国立博物館）氏には須恵器など出土遺物についてご教示を頂いた。

5　金子健一（瀬戸市埋蔵文化財センター）氏のご教示を頂いた。

6　瓦片は、二次的に被熱しブロック状に割れているものがあり、埴輪片にも同様なものがある。



第14図　12次調査地点付近検出の古墳周溝（濃い部分）と中世埋土の溝（淡い部分）の模式図



第15図　12・13次調査区集成遺構平面図（S=1:100）

第３章　第13次発掘調査の概要

Ⅰ．調査の経過

本調査は遺跡範囲内における個人住宅改築に伴うものである。

調査地点は、遺跡範囲の南西端に近く、高座結御子神社の境内西側入口に面する角地に位置する。第12次発掘調査地点の隣接地である。調査対象となった敷地面積は約190㎡、調査期間は平成８年５月13日から６月７日の予定で行った。

調査は旧家屋解体終了後時間を置かずに実施することになっていたが、解体作業が大幅に遅れたために、実際の作業に入れたのは予定より３日後であった。掘削によって生じる排土を積み置きしておく場所を確保するため、調査区全体の南側約３分の２を前半区、残りを後半区として２度に分けて調査を進めた。調査にあたっては、隣接地で行われていた第12次発掘調査での所見を参考にした。

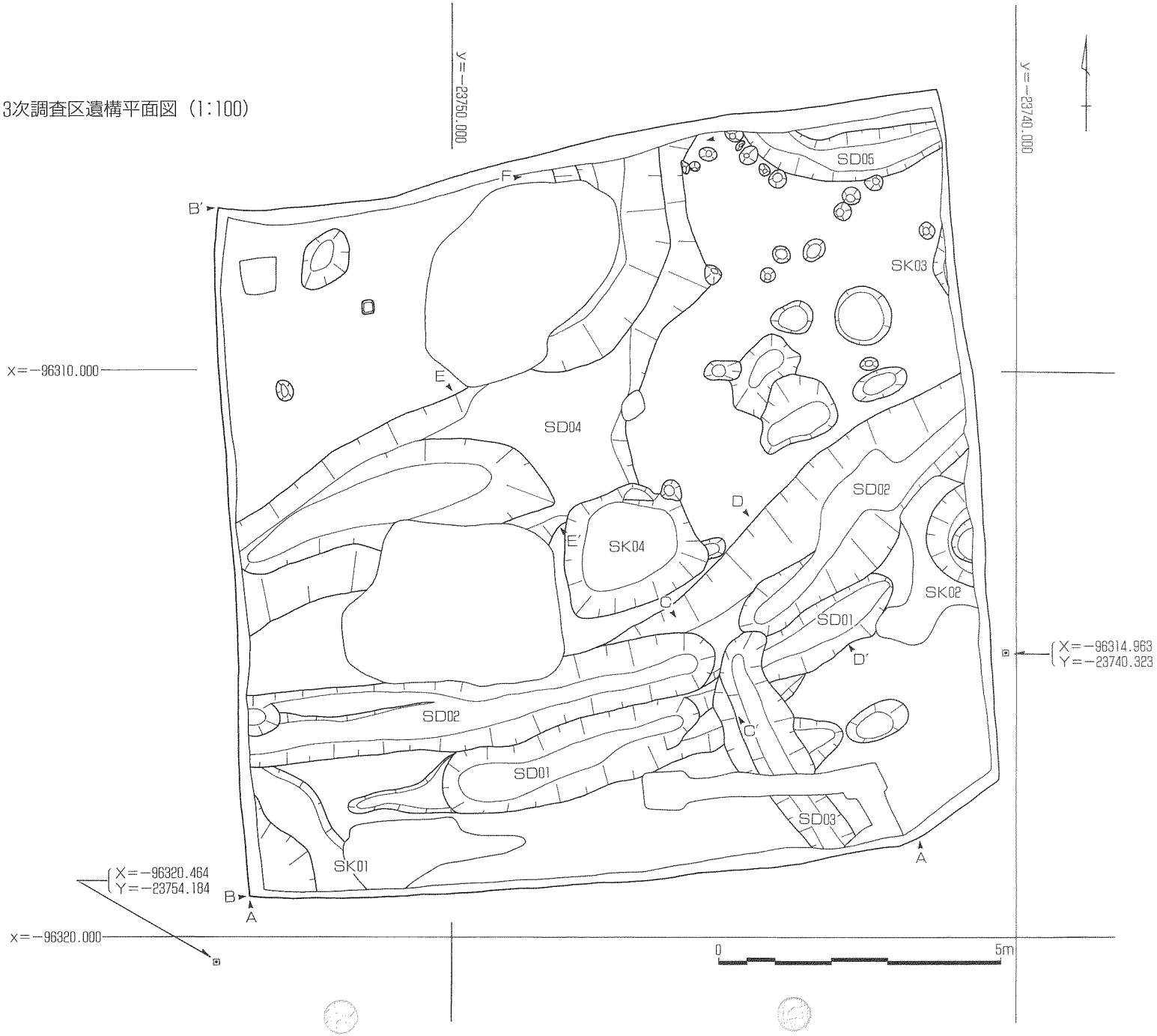
５月16日前半区の表土除去、終了後ただちに包含層掘削を開始。攪乱が大小いくつか点在しており、包含層の残りかたは余り良くない。遺物も中・近世以降のものがまばらに混じる程度である。翌17日までかけて包含層を掘削し、週明けの５月20日から５月27日にかけて遺構検出および仕上げ掘削を行った。前半区では溝状遺構を中心にある程度の遺構密度が認められた。しかし、攪乱によって遺構の正確な把握は難しい状況であった。27日前半区平面図を作成、28日清掃作業の後写真を撮影し、前半区の工程を終了した。

５月29日前半区の埋め戻しと同時に後半区の表土除去を進める。30日から31日にかけて包含層掘削を行い、31日の午後より遺構検出および仕上げ掘削を開始する。後半区は前半区に比べて範囲が狭く、また遺構もあまり検出されなかったため、予想より早く作業が進み、調査期間内に終了可能という目途がたつ。６月４日後半区平面図を作成、５日清掃を行った後写真を撮影、後半区の作業を終了した。

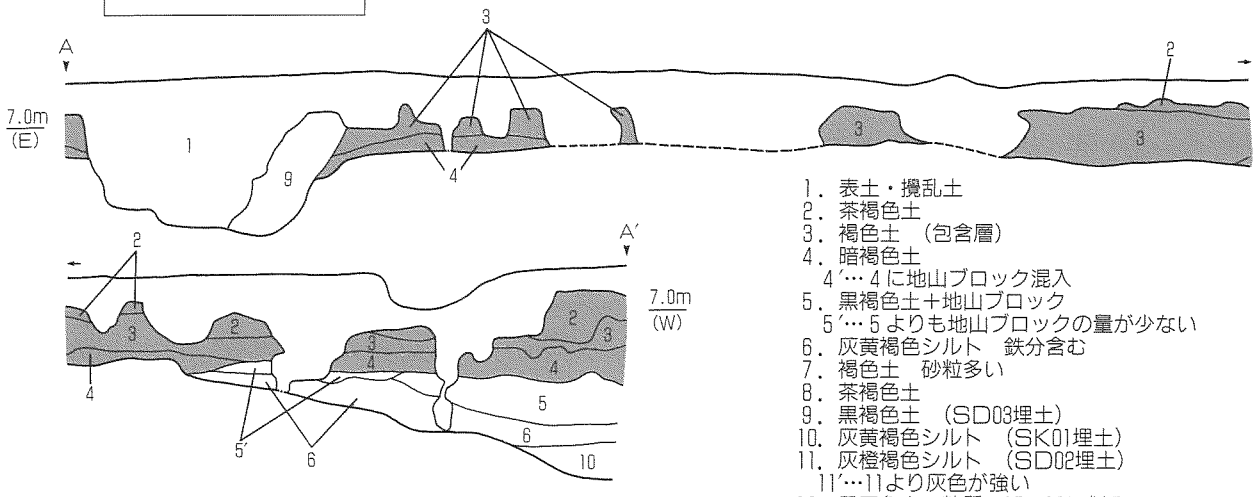
６月６日に後半区の埋め戻しおよび敷地内全体の整地作業を行い、器材を搬出した。６月７日フェンスの撤去などを確認し、現地調査を終了した。

写真15　調査風景
奥の鳥居は高座結御子神社のもの

第16図　13次調査区遺構平面図（1:100）

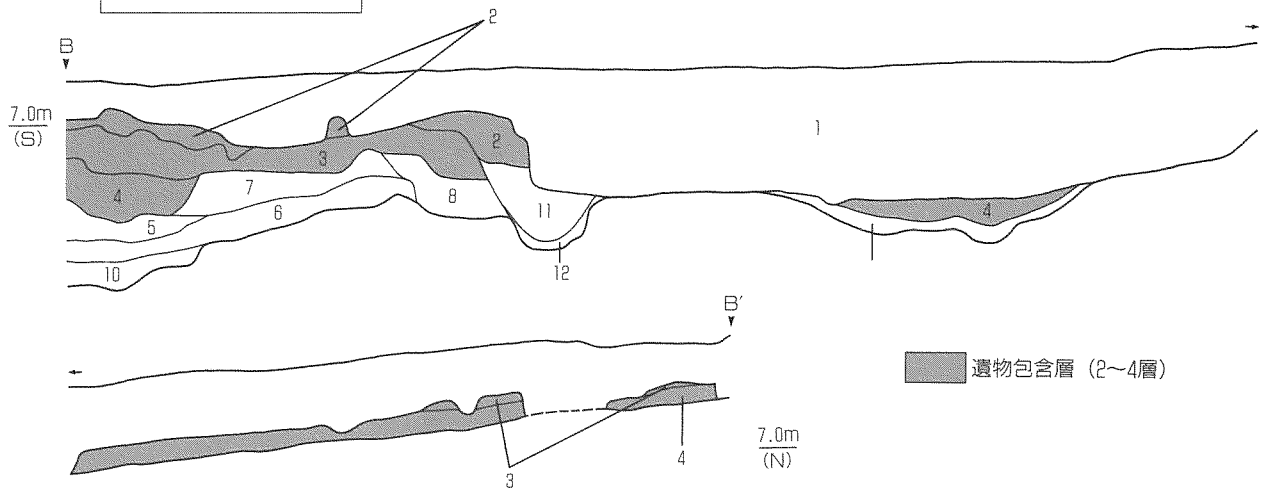


調査区南壁東西セクション (1：50)



1．表土・攪乱土
2．茶褐色土
3．褐色土　(包含層)
4．暗褐色土
　4′…4に地山ブロック混入
5．黒褐色土＋地山ブロック
　5′…5よりも地山ブロックの量が少ない
6．灰黄褐色シルト　鉄分含む
7．褐色土　砂粒多い
8．茶褐色土
9．黒褐色土　(SD03埋土)
10．灰黄褐色シルト　(SK01埋土)
11．灰橙褐色シルト　(SD02埋土)
　11′…11より灰色が強い
12．黒灰色土　粘質、15・16に似る
13．褐色土　(SD04埋土)

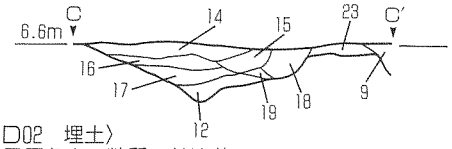
調査区西壁南北セクション (1：50)

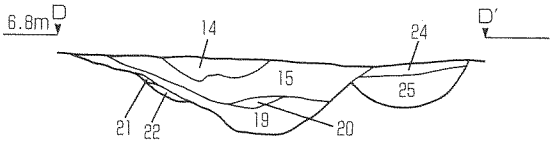


遺物包含層 (2～4層)

0　1　2m
(1：50)

SD01・02セクション図 (1：50)

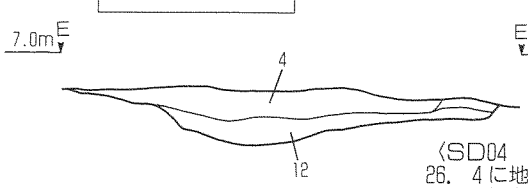


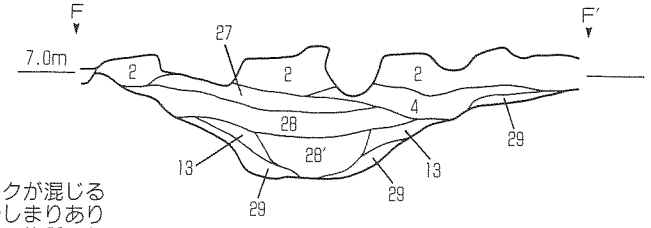


〈SD02　埋土〉
14．黒灰色土　粘質、鉄沈着
15．灰褐色土　やや砂質、鉄沈着
16．灰色土　粘質、13に似る
17．青灰色土　青みが強い、13・15に似る
18．褐色土　砂質、14に似る
19．黄橙色土　地山ブロック土
20．黒灰色土　砂質
21．黄褐色土　地山土が汚れた印象
22．灰黄褐色土＋地山ブロック

〈SD01　埋土〉
23．褐色土　しまりあり
24．黄灰褐色土　鉄沈着
25．黒褐色土＋地山ブロック

SD04セクション図 (1：50)





〈SD04　埋土〉
26．4に地山ブロックが混じる
27．灰褐色土　ややしまりあり
28．黒褐色土　青色の物質沈着
　28′…28よりやや粘質
29．黄灰褐色土　12と同質、やや砂質
　地山ブロック含む

第17図　土層断面図

II．調査の成果

調査区の基本土層は大きく二層に分かれる。第１層の表土層、第２層の茶褐色土から暗褐色土の遺物包含層へと続き、基盤層（地山）である明橙褐色シルト層（熱田層）または遺構埋土へと至る。第２層と地山の間には、地山より若干灰色味が強いシルト層や地山ブロックを含む黒褐色土層が部分的に存在していた。近代以降の攪乱と盛土が目立ち、包含層の残り具合はあまり良くなかった。

遺構は、ほとんどが地山面まで掘り下げないと確認できなかった。また、遺構どうしの切り合い関係は、平面での確認は難しく、新旧の判断はセクション観察によった。検出された遺構は、溝状遺構（以下、溝とする）５基、土坑４基、ピット29基で、それぞれSD・SK・Pを冠し、検出順に番号を付した。遺構密度はそれほど高くは感じなかったが、調査区南側に遺構が集中している様相を捉らえることができた。

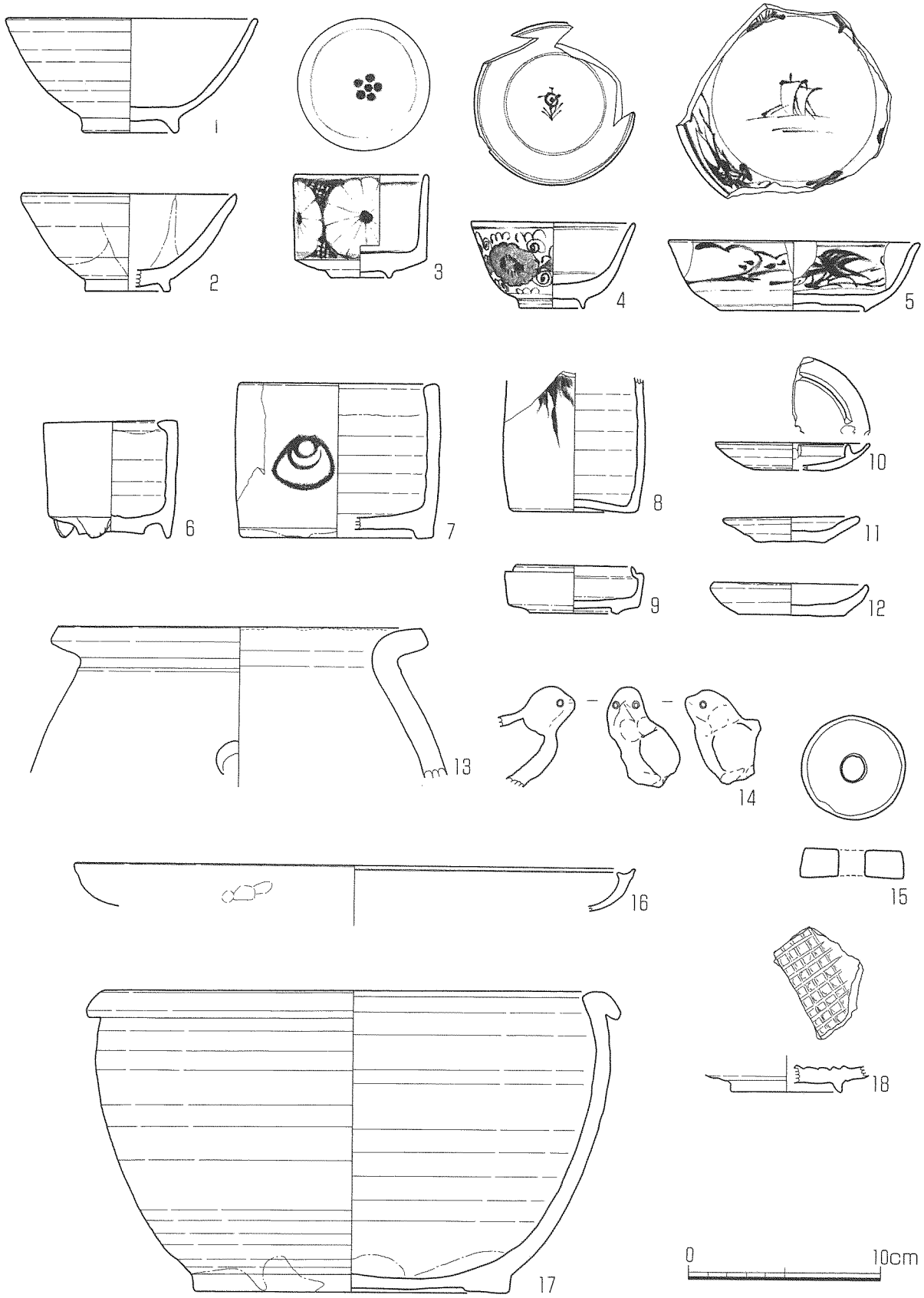
遺物は、コンテナケースにして約５箱分である（第18～21図･写真21～27）。数量的には近世後期の陶器が大半を占め、そのほか古墳時代の須恵器や山茶碗などが出土している。全体的に破片資料が多い。

以下、主だった遺構について出土遺物とともに述べる。

SD02（第17・18図）

遺構　調査前半区で検出した。調査区の中央よりやや南を、現在の神社への参道にほぼ平行するかたちで、東西に緩くカーブを描いている。調査区外に続いているため全体の形状はわからない。検出した範囲では、幅約1.3～2.1ｍで断面は緩やかなＵ字形をしており、東に向かうほど深く掘削されている。SD02は、SD01（中世陶器の小破片が若干出土している）に重なるようにして掘られており、この溝自体も幾度か掘り返された状況が窺える。また、東端ではSK02を、西端ではSK01を切っている。埋土は大きく分けて上位層が灰褐色土、下位層が黒灰色土に分けられた。出土遺物から、埋没時期は19世紀前半と推定される。

遺物　埋土中から出土している。他の遺構に比べ量は多い。やきものの破片資料が大半を占めているが、器形復元が可能な例は少ない。器種は、茶碗・碗・皿などの食器や捏鉢・擂鉢・焙烙・おろし皿などの調理具、貯蔵用甕、灯明皿・灯明受皿・蚊遣りなどの火器、土製品、瓦などが認められ、これらが破損したとき不用な部分を廃棄した結果のようである。やきもの分類上では陶器が一番多い。ほとんどが食器に区分されるものである。陶器の多くは灰釉やさび釉が施されていたが、特徴的だったのは、陶胎染付がかなりの割合で存在していることである。ほとんどが呉須絵だが鉄絵のものもある(７)。文様の意匠としては、茶碗は菊花文(３)が、皿などには舟の見込文(５)・馬の目文(７)が多く見られる。また、半磁器質胎土を持つ端反碗が数点出土している(４)。土師質のやきものは少なく、灯明皿(11)が残る程度である。かわりに常滑の赤物の破片が目につく。常滑の赤物の多くは二次焼成痕を持つ破片で、ススの付着も激しいことから、火器に使用されていたものと思われる。土製品は二点出土している(14・15)。その内の土人形(14)は型を合わせて作ってあり中が空洞である。頭部分のつくりはやや粗雑で、鳥なのかアザラシなのか判断に迷う。遺物の時期は19世紀前半に集中している（註１）。



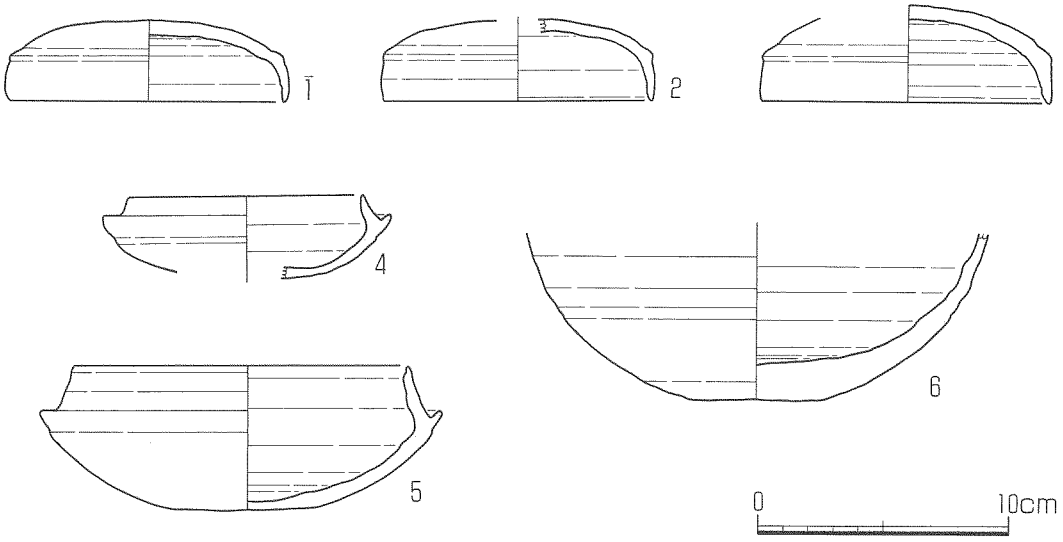
第18図　SD02 出土遺物

SD04（第17・19図）

遺構　調査区西壁中央から北壁中央へ、調査区中央で直角に曲っている。形状はきわめて不整形で、幅は約1.8～3.0m、深さも部分的に深浅を繰り返す。全体像は調査区内だけでは摑めないが、隣接地で行われた第12次調査で、このSD04に続くと思われる溝が検出されており、双方をつきあわせてみると、どうやら方形に巡る溝のようである。この形状から想像できる遺構の性格としては、方墳の周溝が挙げられるが、推測の域をでない。埋土は大きく二層に分けられた。上位層は黒褐色土、下位層は灰褐色土である。遺物から、上位層は13世紀代に、下位層は６～７世紀代にそれぞれ堆積したと考えられる。この二層の間に他の時期の土層が存在しないことから、SD04は６～７世紀に埋没した後、中世に再度掘削された可能性が強い。

遺物　上位層からは山茶碗および伊勢型鍋の小破片が少量、下位層からは須恵器７個体と土師器片がわずかに、それぞれ出土している。上位層の時期は山茶碗の形状から、13世紀前半と推定される（註２）。下位層から出土した須恵器は比較的残りが良い。器種は坏・坏蓋・鉢・小形壺があるが、形状全体を観察できる資料は坏・坏蓋に限られてくる。１・２・４は硬質だが酸化炎焼成による赤焼けのものである。坏の立ち上がりが直線的であること、坏の底部や坏蓋の天井部に明瞭なヘラ削り調整が見られ、全体的に小形で扁平であること等から、Ｈ－50型式に相当すると思われる。また、２や４は底部や天井部の中央部分の破片が検出できなかった。他の破片はまとまって出土していることから、故意に射ち欠かれた可能性もある。一方、３・５・６は青灰色を呈するが、焼きが甘く軟質である。坏の立ち上がりがやや内傾気味であり、坏・坏蓋ともに口縁端部に内傾の段を有すること、全体的に丸みがありヘラ削り調整の範囲が赤焼けの一群より狭いことなどから、この３個体は、やや古相のＨ－61型式に相当すると思われる。

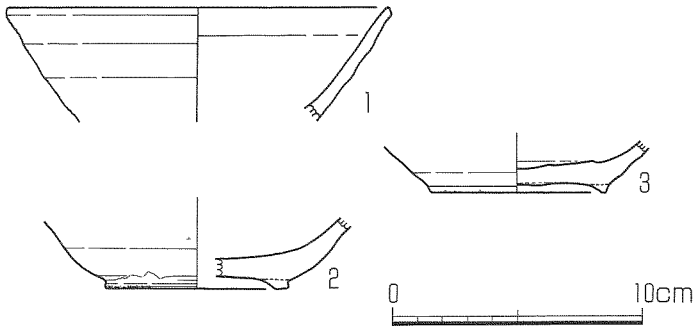
写真16　須恵器出土状況



第19図　SD04下位層出土遺物

SK01（第20図）

遺構　調査区西南の角で検出した。大半が調査区外となるため全体の形状は不明であるが、調査した部分に関しては、比較的緩やかな擂り鉢状の掘り込みであった。第12次調査でこの土坑と、ひと続きになると思われる遺構が検出されている。埋土は灰黄褐色シルトである。遺構の埋没時期は13世紀前半と推定されるが性格は不明（註３）。



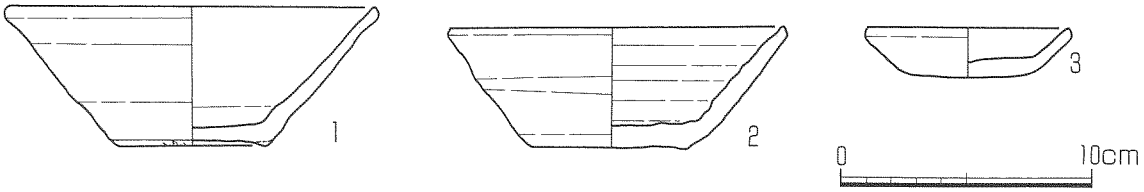
第20図　SK01 出土遺物

遺物　埋土中から出土している。すべて破片資料であり、数量も少ない。山茶碗・伊勢型鍋・瓦などを検出している。山茶碗は、体部にやや丸みが残るもの（２）と、高台が形骸化しつつあるもの（３）や体部が直線的なもの（１）が検出されているので、猿投窯のⅧ－１型式前後のものと言えよう。このほか、鉄滓らしきものも検出されている。

SK02（第21図）

遺構　調査範囲の東端に位置する。攪乱の下から検出された。調査区外にかかるため、検出できたのは全体の２分の１弱程度である。直径は約1.7m 深度は未掘部分があり不明である。筒形で上部でややラッパ状に開く形状を持つ。埋土は、調査している部分では上位層が黒褐色シルト、下位層が灰褐色シルトで、どちらも鉄分の沈着が顕著である。遺物の検出状況から、13世紀後半から14世紀初頭にはかなり埋没していたようである。この遺構は井戸として機能していたと思われる。

遺物　埋土上位層から山茶碗と瓦片が検出されている。山茶碗は完形２個体（１・２）、小皿１個体（３）、小破片数点が出土している。このうち、１は３と同一の淡褐色の胎土で作られていることから、１つのセットと思われる。１は張り付け高台がほとんど剝離しており、残存している部分でもわずかにもりあがる程度である。器壁は直線的に斜めに開き、口縁端部はやや外傾気味に丸みをもたせて処理している。２は１とあまり変らない形状をしているが、高台の痕跡がなく、口縁端部の丸みも無い。１・３のセットと２はどちらも基本的に猿投窯編年のⅧ－３型式だが、２のほうが若干時期が新しいようである。また、２は器の内外両面にススの付着が見られ、全体が二次焼成を受けて褐色に変化している。これは２が火器として使用されたことを示す。瓦片は軟質で色調が淡く、小破片が数点出土している程度である。



第21図　SK02 出土遺物

Ⅲ．小　結

今回の調査地点は、高蔵遺跡の中心とされる高蔵公園・高座結御子神社に近接していながらも、弥生時代の遺構・遺物は皆無、古墳時代・中世・近世の遺構・遺物を検出した。時期毎に成果をまとめてみたい。

古墳時代

SD04が掘削され、6～7世紀代に埋没したと思われる。SD04は、その形状から方墳の周溝の可能性が強い。今回の調査地点付近での過去の調査（市教委第4・6・7次調査）において、埋没した方墳やその周溝の検出が報告されており、今回の成果はこのあたり一帯に集中して方墳を造営していたことを、より強く感じさせる（註4）。

中世

まず13～14世紀代の遺物が、SD04上位層・SK01・SK02など複数の遺構と包含層から出土している。この時期より前の遺物包含層が残存していないことから、この場所で基盤層に達するような土地の整備が行われたと考えられる。

SD04は、6～7世紀に堆積した下位層と上位層との間に他の時期の土層が認められなかったことから、落ち込み状に残っていたこの溝が再度掘削を受け、13～14世紀代に埋没したと思われる。SD04の不整形さは、この中世の再度掘削によるものかもしれない。再度掘削の目的は、SD04を方墳の周溝と考えるなら、土地整備に伴って、当時残存していた墳丘を区画し直すことだったのではないだろうか。

このほか、SD01の埋土中から古瀬戸後期様式の小破片が出土している。

近世

SD02や遺物包含層の上位部分などから遺物が出土している。

SD02からは、19世紀前半に比定される陶磁器などが埋土中からまとまって出土しており、SD02がこの時期に比較的短時間で埋没したと考えられる。しかし、SD02には部分的な掘り込みがあり、それまでにも幾度か掘削を繰り返したようである。SD02自体もSD01に半ば重なるようにして掘削されており、この部分に溝が必要な、なんらかの事情があったことを窺わせる。考えられるのは、調査地点の南側を通る道は古くから高座結御子神社へ続いていることから、道の側溝として機能していたため、というものである。だが、今回の成果からはその性格を判断することはできない。出土遺物は日用雑器がほとんどであり、神社の近くではあるが庶民の生活の場がこの付近に広がっていたことが推察される。

今回の成果からなんらかの確固とした結論を導くことは難しく、推論の域を出ることはできない。検出した遺構の性格などを明確にするには、さらなる調査の積み重ねが必要である。しかし、埋没古墳の存在、13～14世紀に遺構・遺物が集中する傾向など、過去の調査で指摘されてきた事項を追従できたのは、今後遺跡の西側地域での調査に際し、有効な材料となるだろう。

註

1　水野裕之氏の教示による。

2　須恵器および山茶碗については、尾野善裕氏に非常に多くの教示を頂いた。

3　前章において水野氏は、SK01と12次調査のSD01の同一遺構としての可能性を指摘している（第13図参照）。とすると、今回は土坑としたが、この地点で屈曲する溝と考えることもできる。

4　前章を参照されたい。

写真17　前半区遠景（北から）

◀写真18　SD01・02（東から）
中央手前がSD02。やや左奥がSD01

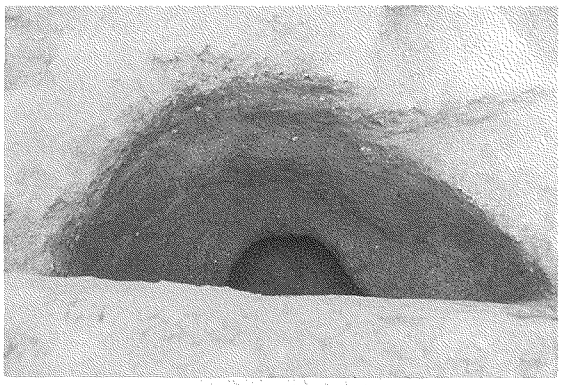


写真19　SK02（東／上から）▶

写真20　後半区遠景（南東から）
中央を左右に通っているのがSD04

遺物写真

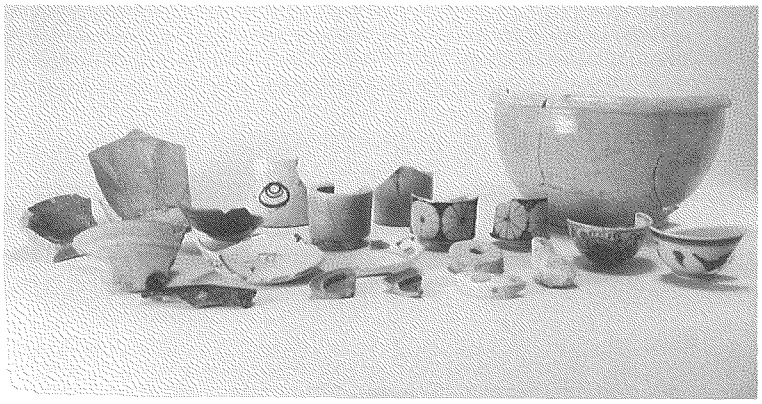


写真21　SD02 出土遺物

写真22　SD02 香炉

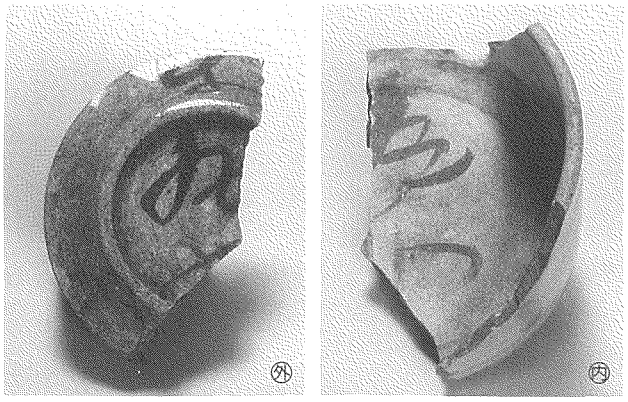


写真23　SD01・02 セクション墨書陶器

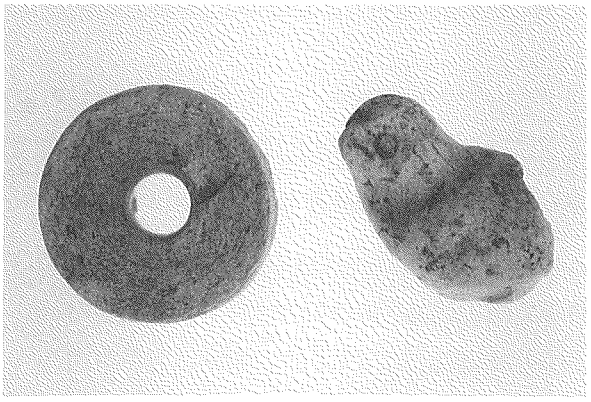


写真24　SD02 土製品

写真25　SD04 須恵器

写真26　SK01 山茶碗片

写真27　SK02 山茶碗

第４章　第14次発掘調査の概要

Ⅰ．調査の経過

第14次調査は、高蔵町513、高蔵公園を南に臨む地点である。平成８年、同地点で個人住宅の建て替えが行われることになり、建設にあたっては事前に発掘調査を実施するよう愛知県教育委員会教育長から指示が出された。このため事業者からの依頼を受け、名古屋市教育委員会で調査を実施した。発掘調査は、見晴台考古資料館が実施し、平成８年７月22日から同年８月16日まで行った。調査面積は、約90㎡である。

調査区を南北に２分し、先に南半区、後に北半区の順で調査を行った。７月22日に南半区南端から機械による表土除去を開始し、包含層掘削・遺構検出を並行して進めた。７月25日までには遺構の掘り上げをほぼ完了した。７月26日には南半区の遺構掘り上げ後の写真撮影、および「遺跡測量システム」による遺構実測を行い、埋戻しに着手した。

北半区は、７月29日から表土除去を北端から開始、包含層掘削・遺構検出を並行した。７月31日には北半区の南寄りで検出された弥生時代の溝（SD２）の検出状況を写真撮影した後、土層観察用のベルトを２か所設定し、掘り上げを開始した。８月１日にはSD２の埋土中ほどから弥生土器が10数個体出土しはじめ、南肩では土器棺と思われる弥生土器の壺を確認することができた。８月２日・５日の両日には、セクションベルトの写真・実測・撤去を済ませ、翌６日にはSD２の土器出土状態を含めた、北半区全体の遺構掘り上げ状態の写真を撮影。８月６日から８日にかけて、SD２の土器出土状況の実測を行いながら、順次遺物を取り上げた。８月９日までに遺構実測および調査区周囲のセクション図実測を完了し、埋戻しを開始した。８月16日には埋戻しおよび後片付けを終え、現地での調査作業を完了した。

Ⅱ．調査の成果

１　地形、土層と遺構の分布

標高約8.5ｍの台地上の中央部に位置し、起伏の少ない平坦な旧地形に立地するものと思われる。台地西縁からは最短距離でも約300ｍ、東縁からは約250ｍのところに位置する。現況は、南に高蔵公園と高座結御子神社をひかえた静かな住宅地となっている。

調査地点は、熱田層からなる台地上の遺跡で通常みられるのと同じく、黄褐色ないし橙褐色のシルト質のつよい土が基本的に最終遺構検出面（地山面）となっている。後述するSD２など深い遺構の壁面・底面には、黄色の硬く締った砂質土が一部地山面となる。地山面は標高8.3ｍ±10cmとほぼ平坦であった。

地山面の上には、茶褐色土→灰褐色砂質土→灰色砂質土→暗灰色砂質土（盛土）の順で堆積するのが、基本的層序である。地表からの平均的な深さは約60cmであり、うち盛土は25～50cmを占める。地山直上の茶褐色土からは、中世の山茶碗片や土師器片が出土しており、防空壕などの攪乱坑の部分を除きほぼ全域にわたり10～25cmの厚さで堆積する。北半区、とくに北西部で厚く堆積がのこっていた。

遺構は、ほとんどが地山上で検出したものである（第22図）。遺構の種類は、溝状遺構（SD）が４条、土坑状遺構（SK）６基、柱穴と思われる穴を含むピット（P）が約160個あり、また弥生土器の壺を埋めた土器棺と思われるもの（SX）が１例みつかっている。遺構は、調査区中央を横切る弥生時代中期のSD２を境に、北半区の方が密度が高い。調査区の、南端と中央部に大量のガレキで埋めた方形の土坑があり、大戦中の防空壕と思われた。

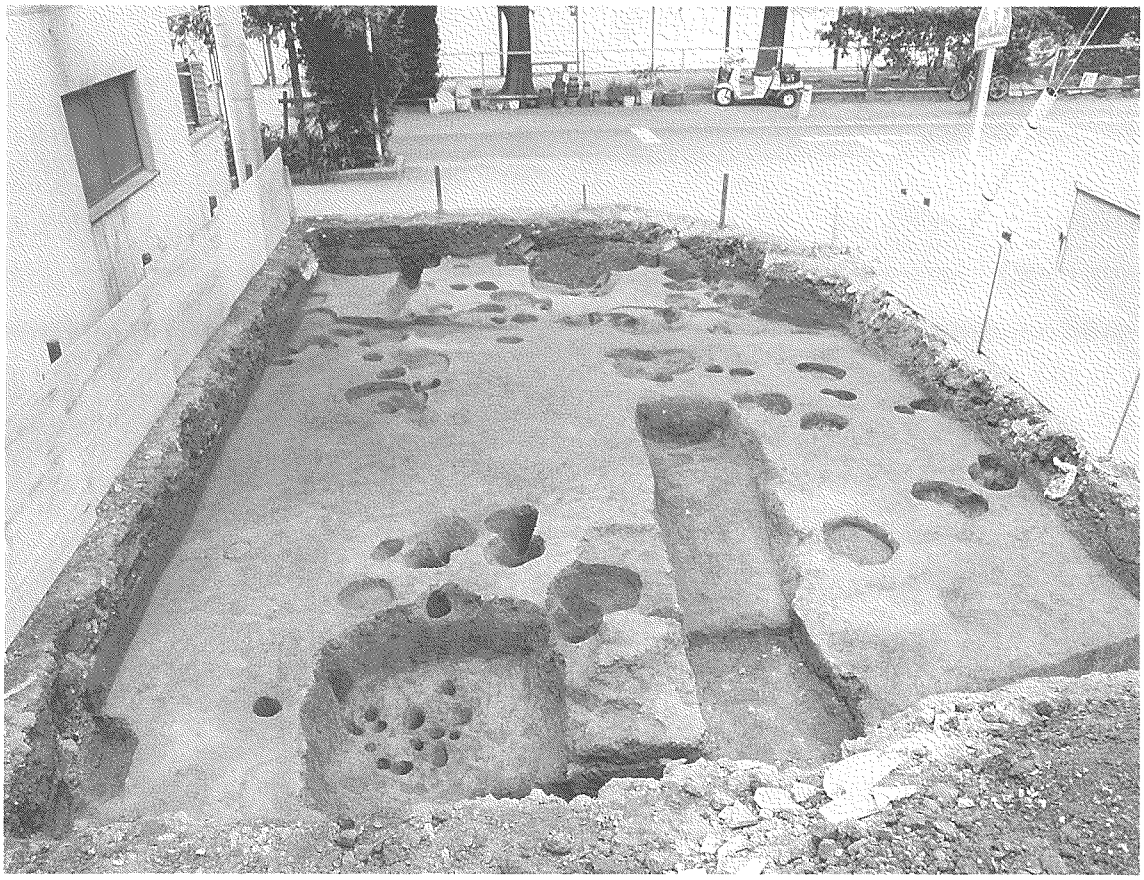


写真28　南半区(前半区)全景　北から

写真29　北半区(後半区)全景　南から

第22図　14次調査遺構平面図および土層断面図（1/100）

調査区東壁西面土層断面図

1　暗灰色砂質土(表土)
2　灰色砂質土
3　灰褐色砂質土
4　茶褐色土
5　淡茶褐色土(P１埋土)
5′　地山(橙色シルト)ブロック混
6　茶褐色土と地山ブロックの混合(P15埋土)
7　暗褐色土
8　褐色土と地山ブロックとの混合
9　暗褐色土　シルト質つよく、しまる、黒みつよい
10　暗褐色土　シルト質ややつよく、ややしまる(SD３埋土)
11　褐色土と暗褐色土との混土　鉄分の沈降めだつ
12　暗褐色土　11の土にくらべ鉄分沈降少なく、シルト質つよい(P160埋土)
13　暗褐色土
14　褐色土　地山ブロックめだつ
15　暗褐色土
16　暗褐色土　地山・焼土ややめだつ
17　暗褐色土　焼土ブロック多い
18　暗褐色土　地山ブロックめだつ
18′　暗褐色土　地山ブロック大きめ多い
19　暗褐色土　褐色＞黄褐色＞黒褐色土で混
20　暗褐色土　黄褐色＞褐色＞黒褐色土で混　19の土にくらべ砂質つよい
21　暗褐色土　黒褐色＞褐色≧黄褐色で混
(19～21層は、SD２の１～３層に相当する。)

2　弥生時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代中期後半の土器を出土する溝（SD２）と、溝の南肩に埋納された土器棺と思われる同時期の壺（SX１）がみつかった。

SD２（第23・25～27図）　調査区の中央付近にあたる北半区の南寄りで検出され、南西端肩のわずかな一画が南半区の調査時にみつかっていた。溝は、東西方向から約25°ふって、南西から北東へ直線状にのびており、約６ｍ分が調査区内にかかっており、両端とも調査区外にむかってのびている。

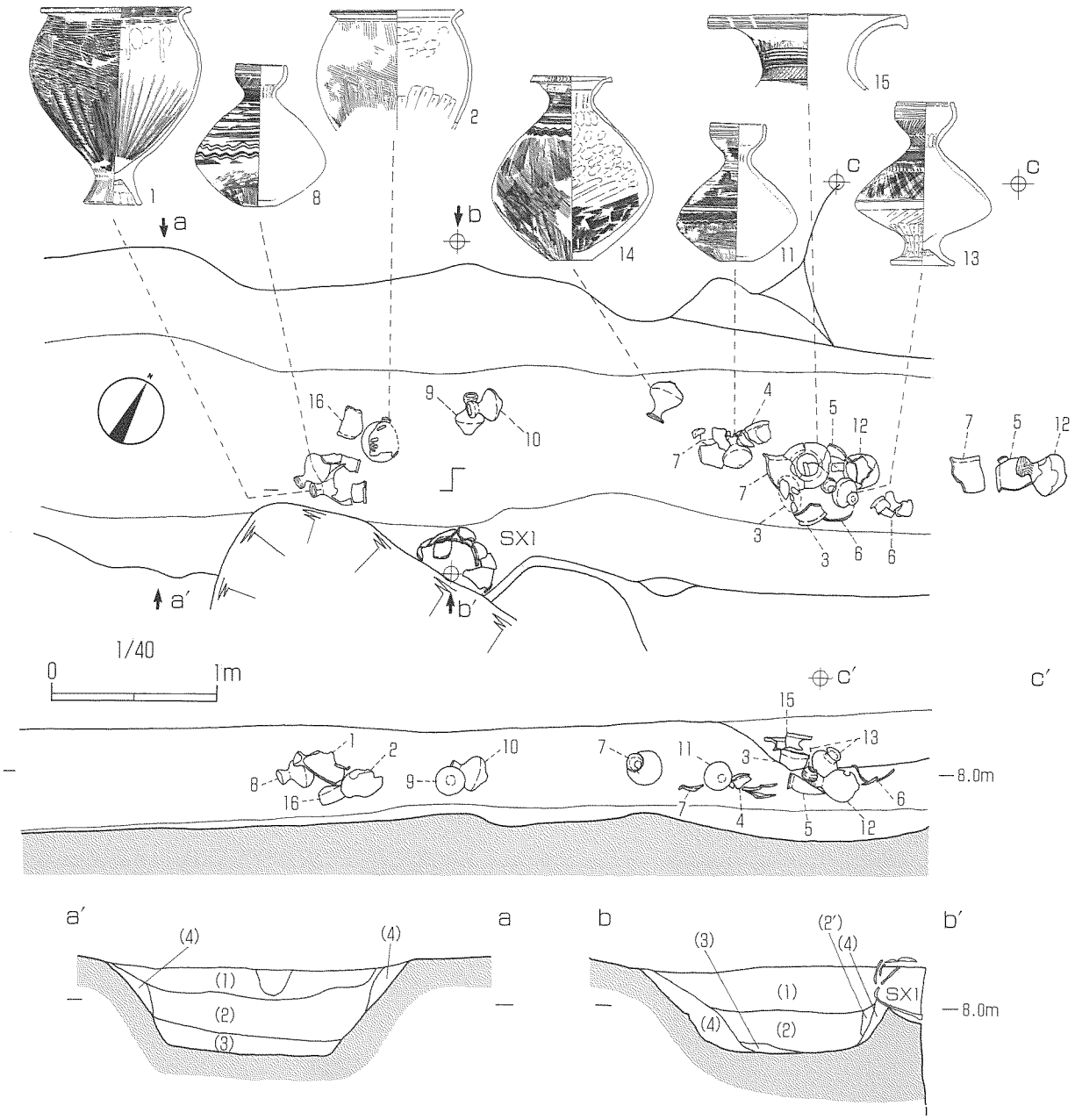
SD２は、検出した地山面で幅1.5～1.8ｍ・深さ約50cmを測る。断面は、やや扁平なＵ字状を呈する。埋土は、暗褐色土であり、土粒の割合や質感などから、３層に分層できる。分層はできるものの、埋没の時間差は大きくないと考える。埋土は上面を除いて、砂質がちで締まりはつよくない。ただし、東端付近の上層は黒みがつよく硬く締ったシルト質のつよい土であり、北側にある土坑（SK４・５）を掘り込む際に影響を受けている可能性が高く思われる。

溝内からは、完形あるいは形のわかる土器15点と敲打痕および擦痕のある礫塊石器２点が出土している。土器は単独あるいは数点のかたまりが、溝の中位に点在する出土状況を呈する。土器出土の下端レベルは、標高7.8ｍ付近であり、溝底からは10～25cmほど離れていた。東端付近は、上位のシルト質がつよい土からも、広口壺の口縁部片などが出土しており、西側の状況とはやや違いがみられた。東端の上層については、前述の様に、北側の土坑掘削の際に攪乱され再堆積した可能性も含めて考える必要がある。溝内からは、他には破片などの遺物量は少ない。出土状況からは、完形の土器が溝内に転落した状況が考えられる。

出土した弥生土器の内訳は、壺８点（うち広口壺２、細頸壺６）、甕７点であり、高杯など他の器種は含まれていない。広口壺のうち１点は、大型の壺の口縁部のみであり(15)、胴部の破片はみつかっていない。細頸壺は、完存に近いものが多く、うち１点には脚台部が付く(13)。甕は２点が台付甕であり、他は胴中央部より下が欠失しているため台の有無は不明である。また、礫塊石器２点は、砂岩の偏平な円礫であり、うち大きめの１点(16)は火を受けた痕跡がある。表面は擦れて平滑あるいは敲打による浅い凹みとなっている。土器はいずれも弥生時代中期後葉のいわゆる高蔵期に属するものであり、溝が機能した時期もこの頃と考えたい。

写真30　SD２土器出土状況　南から

写真31　同　左　西から



SD２・SZ１土層断面図
1　暗褐色土　褐色＞黄褐色＞黒褐色土で混　2　暗褐色土　黄褐色＞褐色＞黒褐色土で混　3　暗褐色土　黒褐色＞褐色≧黄褐色で混　4　暗褐色土に地山ブロック多く混
1の土にくらべ砂質つよい

第23図　SD２土器出土状況および土層断面図（1/40）

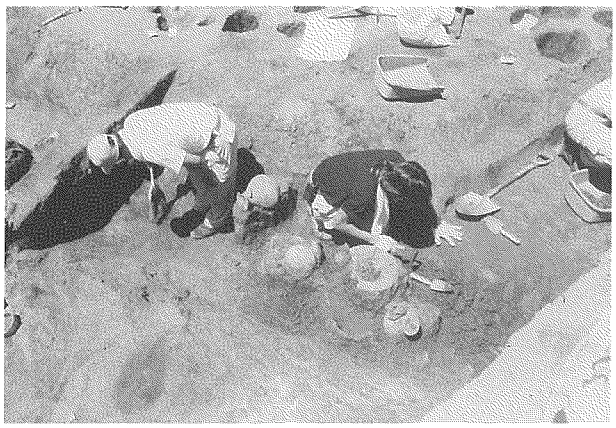


写真32　SD２発掘作業のようす　南東から

写真33　SD２土層 b-b′　西から

SX１(第23・24図)　SD２の南肩際を掘り込むようにして小土坑が掘られ、胴径約50cmの壺が据え置かれていた。掘り込みは、SD２が少し埋まり始めた時点で行われたことが、土層の切り合いから観察できる(第23図、b-b′土層図)。土坑および壺は、南側が防空壕の掘り込みによって失われており、全体の約半分がのこっていた。壺と土坑掘り方の間は、２～５cmほどの茶褐色土と地山黄褐色シルトの混土で埋まっていた。

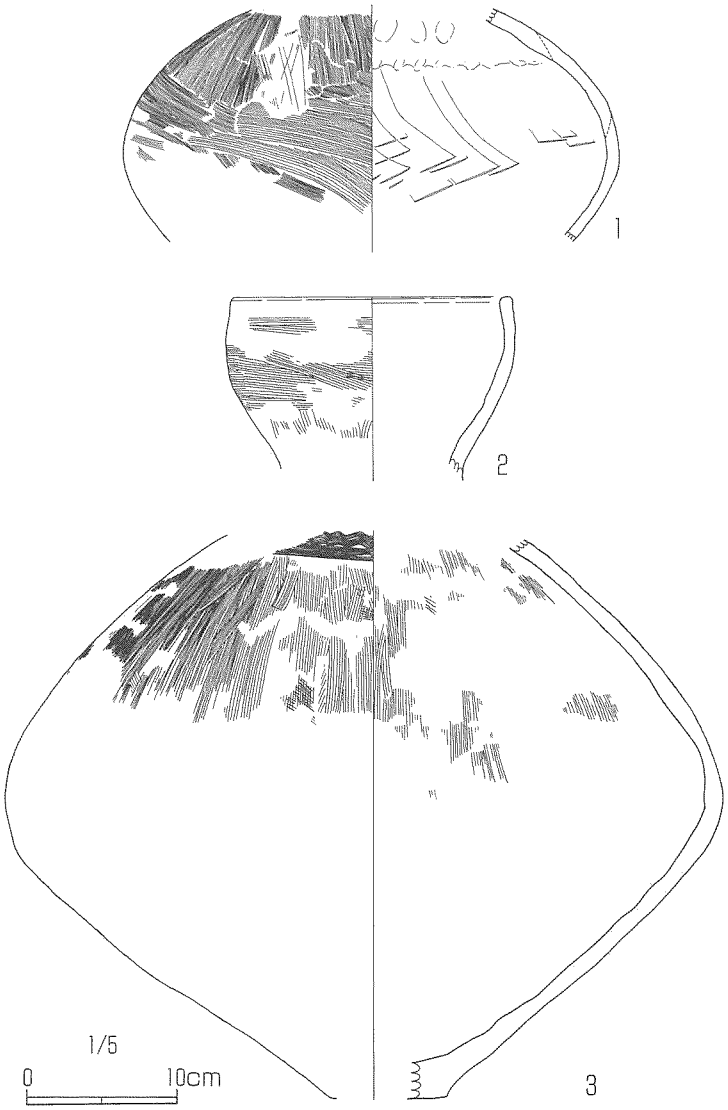
壺は、大型壺の胴部上端から上を切り離したもので、切り口の上を土器の破片を蓋状にかぶせていた。かぶせられた破片は、２個体分からなり、うち１点は本体から切り離された口縁部である可能性が高い。口縁部は口径14.4cmで、袋状を呈し、いわゆる太頸壺とよばれるものに近い。口縁部外面は、器面調整のハケ目がのこるものの、施文はまったくみられない。別の１点は中型の壺の上胴部片であり、口縁部や下胴部および底部片は出土していない。壺の時期については、SD２と同じく弥生時代中期末の範囲におさまるものと思われる。

SX１は、その形状から、壺棺と考えられ、時期的にはSD２と重なるものと思われる。

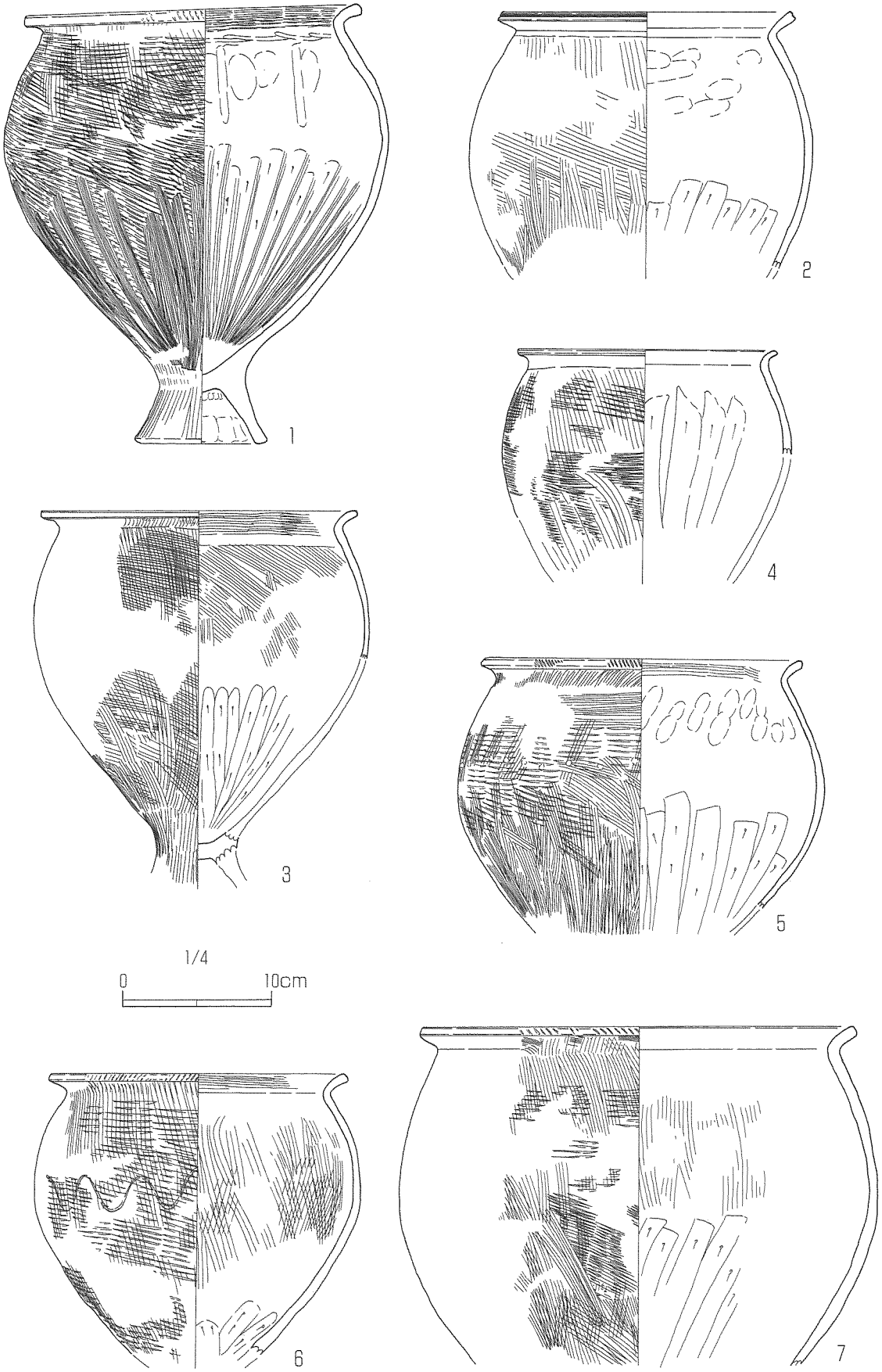
〈参考文献〉
高橋信明　1982　「壺棺」『朝日遺跡Ⅰ』
愛知県教育委員会

写真34　土層 b-b′SX１部分　西から

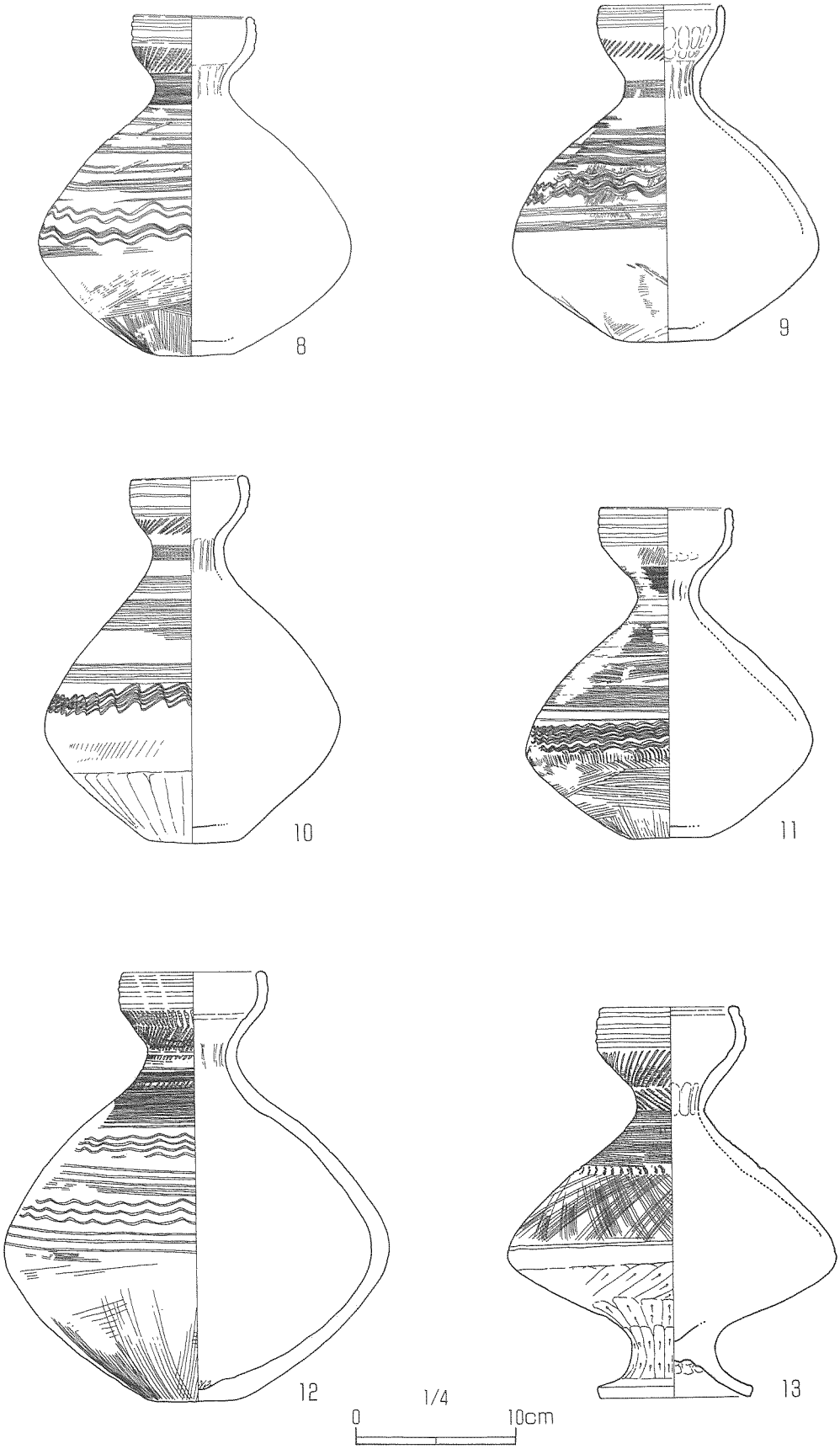
写真35　SX１検出状況　東から



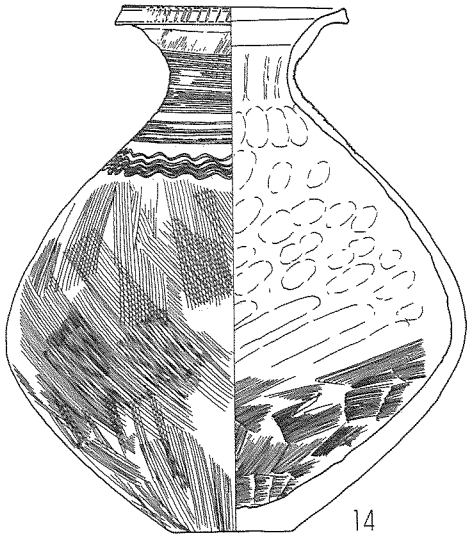
第24図　SX１土器実測図(1・2が蓋、3が身)(1/5)

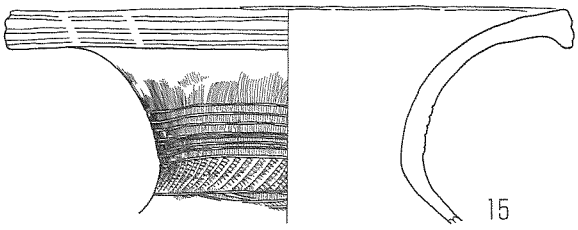


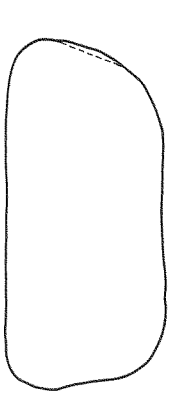
第25図　SD２出土遺物実測図　甕（1/4）

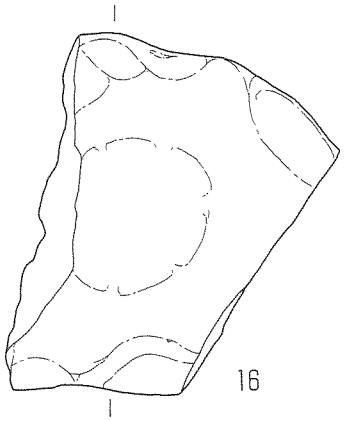


第26図　SD２出土遺物実測図　細頸壺（1/4）









1/4
0 10cm

第27図　SD 2 出土遺物実測図　広口壺・石器（1/4）

写真36　SD 2 東半の土器出土状況　上位　北西から

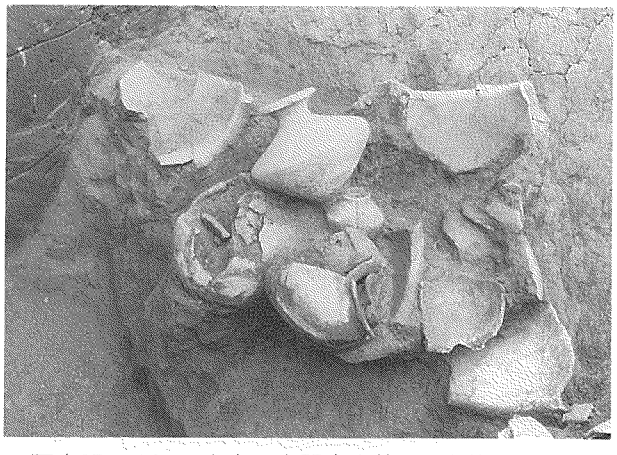


写真37　SD 2 東半の土器出土状況　中位　北西から

写真38　SD 2 東半の土器出土状況　下位　北西から

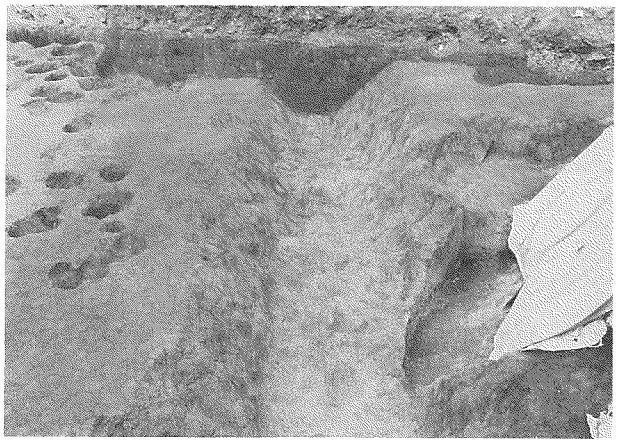
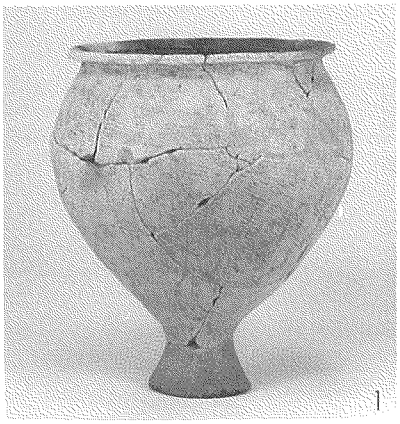
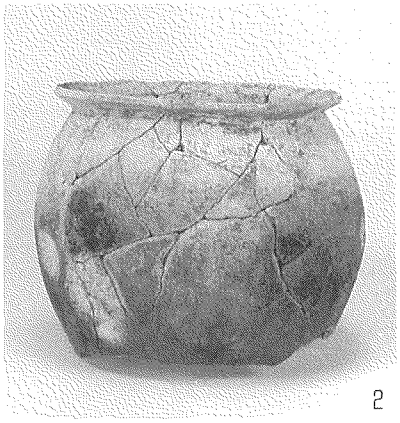
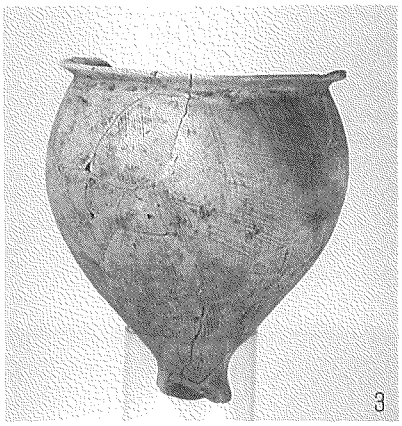
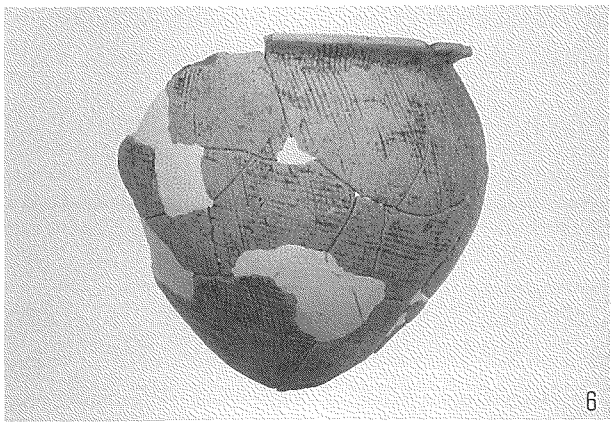


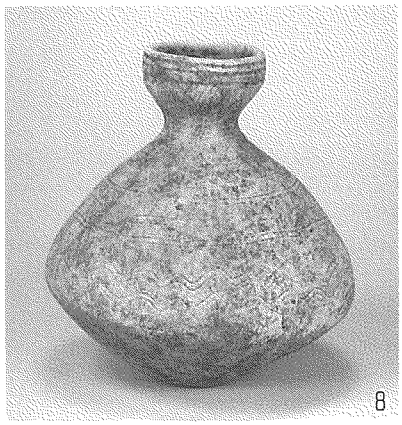
写真39　完掘後の SD 2　西から

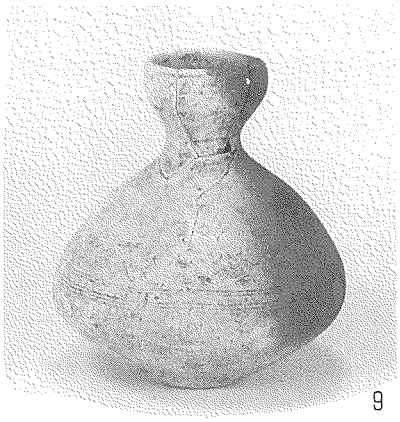












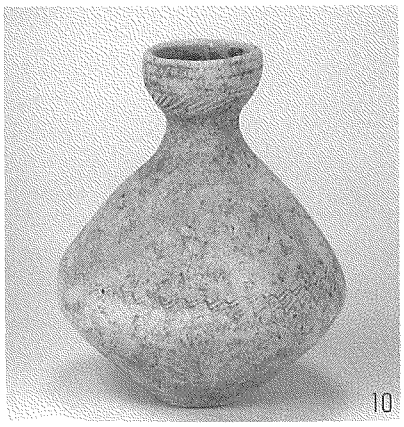
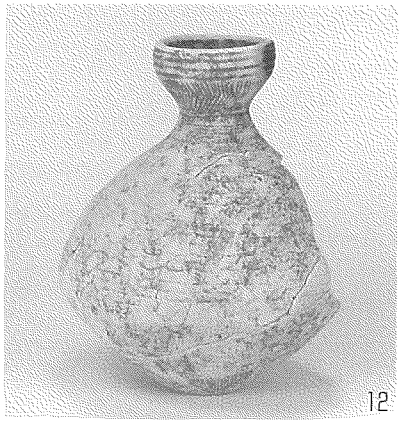
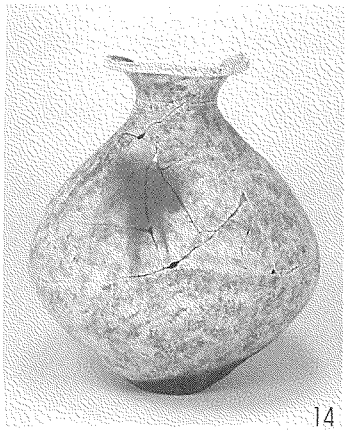


写真40　出土遺物　その１

11

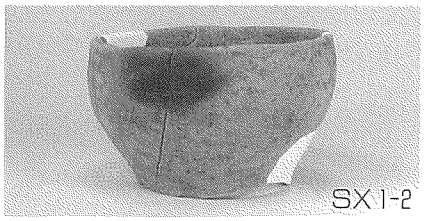

12

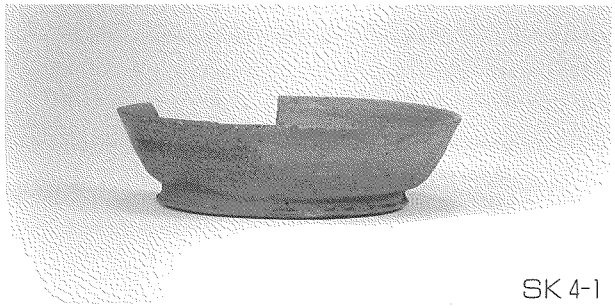
13


14

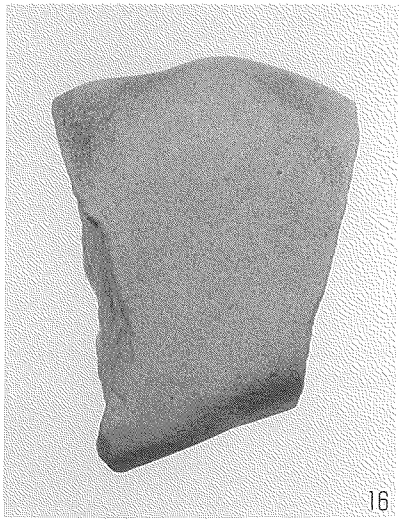
SX 1-3

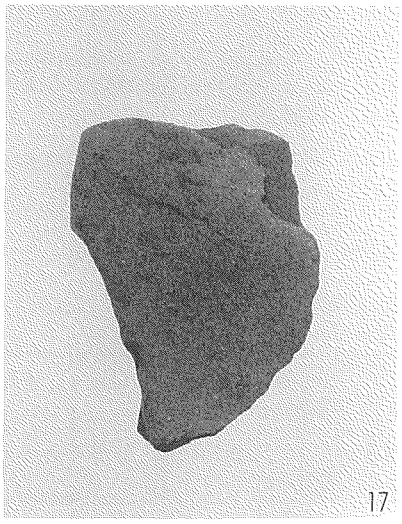
15


SX 1-2


SK 4-1

東壁11層


16


17

防空壕

写真41　出土遺物　その2

表5　14次調査 SD 2 出土弥生土器観察表

図版	器　種	遺存状況	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm) 器高(cm)	主　な　特　徴
1	台付甕	全体の約1/2	22.8　26.0 9.0　29.9	体部外面タタキ→ハケ、口縁端部クシ刺突、台部外面ハケ、体部内面下半ケズリ、上半ナデ，口縁内面ヨコハケ。
2	甕	口縁・上胴部の約1/2	20.2　23.3 (17.0)	体部外面ナナメハケ→タテハケ、口縁端部2条の平行沈線、体部内面下半ケズリ、上半ナデ。
3	台付甕	口縁・胴部・台部の約1/2	21.3　23 (25.5)	体部外面ハケ、体部内面下半ケズリ、上半ハケ、口縁内面ヨコハケ。
4	甕	口縁・上胴部残存	17.7　19.8 (15.5)	体部外面タタキ→ハケ、体部内面下半ケズリ、上半ナデ，口縁内面ヨコハケ。
5	甕	口縁・上胴部の約1/2	21.8　24.8 (18.5)	体部外面タタキ→ハケ、1段の刺突文、口縁端部クシ刺突、体部内面下半ケズリ、上半ナデ，口縁内面ヨコハケ。
6	甕	口縁・上胴部の約1/2	(20.2)　(22.0) (19.0)	体部外面タタキ→ハケ、中央にヘラ描き波状文、口縁端部クシ刺突、体部内面底部付近ケズリ、上半ハケのこる、口縁内面ヨコハケ。
7	甕	口縁・上胴部の約1/3	(29.7)　(32.4) (22.8)	体部外面タタキ→ハケ、口縁端部クシ刺突、台部外面ハケ、体部内面下半ケズリ、上半ナデ，口縁内面ヨコハケ。
8	細頸壺	完存	7.6　19.8 5.4　21.4	袋状口縁で口縁に3条の凹線、体部外面下胴部タテハケ→ヨコハケ、口縁下半から上胴部にかけて刺突・簾状・直線・波状のクシ描文、口縁内面ナデ
9	細頸壺	完存	7.4　19.3 5.8　21.2	袋状口縁で口縁に3条の凹線、体部外面下胴部タテハケ→ヨコハケ、口縁下半から上胴部にかけて刺突・簾状・直線・波状・平行のクシ描文、口縁内面ナデ
10	細頸壺	完存	7.5　18.7 5.7　23	袋状口縁で口縁に4条の凹線、体部外面下胴部板状のナデ、口縁下半から上胴部にかけて刺突・簾状・直線・波状のクシ描文、口縁内面ナデ
11	細頸壺	ほぼ完存	8.6　18 4.8　20.8	袋状口縁で口縁に4条の凹線、体部外面下胴部タテハケ、口縁下半から上胴部にかけて刺突・簾状・直線・波状のクシ描文、口縁内面ナデ
12	細頸壺	胴部の1/2を破損	9.4　24 5　27.1	袋状口縁で口縁に4条の凹線、体部外面下胴部ヨコハケ→タテハケ、口縁下半から上胴部にかけて2段の刺突・直線・波状・平行・波状・平行のクシ描文、口縁内面ナデ
13	台付細頸壺	完存	9.4　20.7 9.8　24.5	袋上口縁で口縁に4条の凹線、体部外面下胴部および台部ケズリ、胴中央ヨコナデ、口縁下半から上胴部にかけて2段の刺突・簾状・扇形刺突のクシ描文、ハケによる斜格子文、胴中央ヘラ沈線、口縁内面ナデ
14	広口壺	完存	12.4　24 6.4　23	口縁はラッパ状に強く開き口縁端部ヘラ列点文、体部外面ハケ、頸部から上胴部上半にかけて直線・波状のクシ描文、体部内面ナデ、底面付近ハケ
15	広口壺	口縁・頸部	30.2 (11.0)	口縁はラッパ状に強く開き，端部を下方につまみ出す、口縁端部3条の凹線、体部外面タテハケの上に6条の平行沈線・クシ描列点文

表6　14次調査 SD 2 出土石器観察表

図版	器　種	遺存状況	長さ(cm)　幅(cm) 厚さ(cm) 重さ(g)	主　な　特　徴
16	礫塊石器	(完存)	18.0　12.0 8.4　3920	片面に敲打痕による浅い凹み、反対面平滑、火を受けた痕跡あり。
17	礫塊石器	(完存)	12.0　6.2 3.9　530	一端面に、光沢をわずかにもつ擦痕がみられる。

表7　14次調査 SX 1 出土弥生土器観察表

図版	器種	遺存状況	口径(cm) 胴径(cm) 底径(cm) 器高(cm)	主　な　特　徴
1	壺	胴部のみ約2/3周、反転復元	(32.8) (16)	胴部がつよく張る、体部外面細かいハケ、内面板ナデ
2	壺	口縁部のみ、3と同一個体か	18.4 (12)	袋状口縁、体部外面ハケ
3	壺	胴部～底部約1/2	(47.4) (7.8)　(38)	体部外面・内面ともにハケ、胴部上端に波状・直線のクシ描文

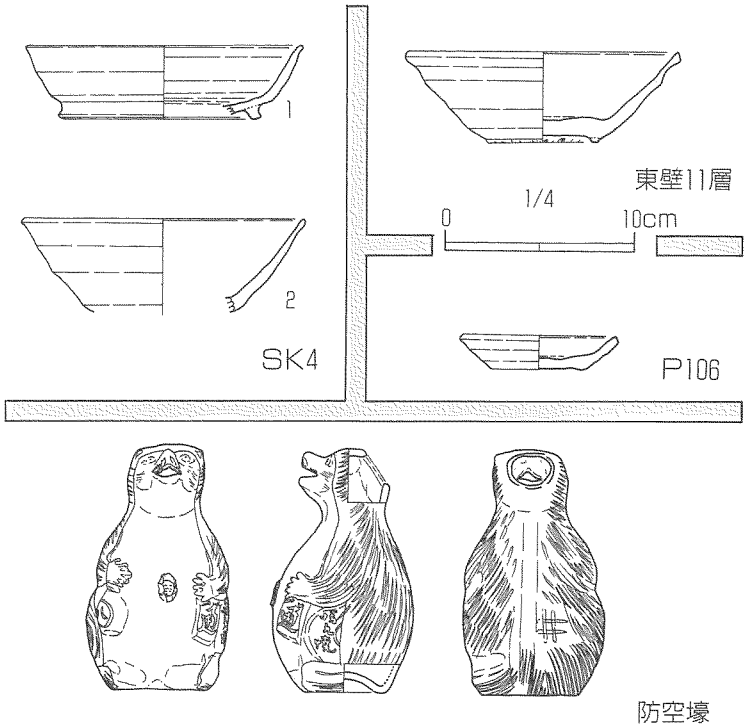
3　古墳時代以降の遺構と遺物

古墳時代の遺物は、7C代の須恵器の小片がみられる程度で、きわめて少量である。奈良・平安時代については、SK4・5やP74・P135などから須恵器や土師器の小片が出土している。SK4の北端では、底部を円形に欠く9C中頃（猿投窯Ⅳ・ⅠG-78号期）［斎藤孝正1987］の須恵器・杯身（第28図SK4-1）が出土するものの、山茶碗と混在した状況である。SK5は、周溝状のSD4を伴い、8C後半～9C前半の須恵器・土師器を出土するが、小片かつ少量であり、遺構の時期を確定するに至らなかった。

鎌倉時代の山茶碗片は、茶褐色土の包含層や30前後を数えるピットなどの遺構から出土する。遺構埋土は茶褐色土を主に、淡茶褐色・暗褐色に近いものもみられる。SD1・SD3の溝状遺構およびSK1～4の土坑状遺構からは、山茶碗の小片などが出土するが、遺物量は少ない。SK4や東壁第11層下端出土の山茶碗は、12C末～13C前半頃（猿投窯Ⅶ-3～Ⅷ-2期）［斎藤孝正1988］のものであり（第28図）P106から出土した山茶碗・小皿も同様の時期が考えられる。山茶碗以外には、P130から、非ロクロ成形の土師皿が1点出土しており、やはり13Cのものと推定される。

近世以降は、第2次大戦中の防空壕と思われる土坑を2ヶ所で検出したのみである。うち、調査区中央付近、南半区と北半区にまたがった壕には、酒屋の屋号が書かれた御通徳利や狸形をした徳利などの陶器類が多量の瓦礫とともに廃棄されていた。狸形徳利は㊅の徳利を抱えた珍品である（第28図）。

〈参考文献〉
斎藤孝正　1987　「猿投窯Ⅳ期における須恵器生産の様相」
『名古屋大学文学部研究論集XCⅧ　史学33』
斎藤孝正　1988　「中世猿投窯の研究」『名古屋大学文学部研究論集CⅠ　史学34』
尾野善裕　1992　「名古屋台地出土の土師質土器皿について」
『見晴台遺跡　第30次発掘調査の記録』名古屋市見晴台考古資料館



第28図　各遺構出土遺物実測図（1/4）

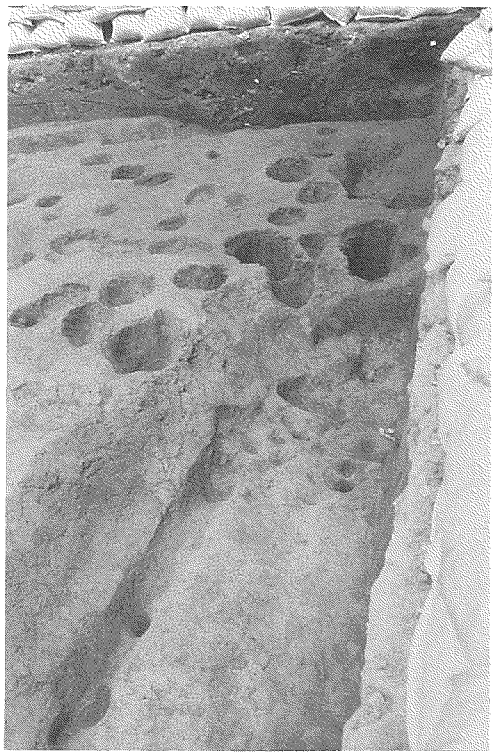


写真42　調査区北東部の遺構
手前の掘り込みがSK4・5　南から

Ⅲ．小　結

第14次調査では、90㎡という小面積の調査ながら、弥生時代中期後葉（高蔵期）の溝状遺構であるSD２および同時期の土器棺墓であると思われるSX１といった、弥生時代の高蔵遺跡を理解する上での貴重な資料を得ることができた。また、古代・中世についても、ピットや土坑などの性格を明らかにすることはできなかったものの、遺構と遺物の分布の広がりを知る一助となったと思われる。以下、SD２について、推測をまじえながら、簡単にまとめておきたい。

〈SD２と高蔵遺跡の弥生時代中期後葉の様相について〉

弥生時代中期後半は、高蔵遺跡では集落が拡大する時期といわれ［㈶荒木集成館編1989・1991］、また尾張地方の中期後半の土器を「高蔵式土器」として当遺跡出土の土器を代表させてきた経緯がある（註１・２）。明治41（1908）年の遺跡発見以来、第２次大戦後の昭和30年代の調査・発見は主に遺跡の北東部つまり現在の大津通の沿線で行われていた。田中稔氏のいうＥ地点および1951年の名古屋大学の調査地点も大津通の東に接する位置にあり、深さ1.5ｍ程度の溝状遺構から弥生時代中期後葉の土器群が出土したことが報告されている。近年では、同じく大津通に東接する沢上二丁目501地点で、中期後葉に属するという竪穴住居跡が発見された他、小規模ながら調査が行われている［名古屋市見晴台考古資料館1996a］。散発かつ小規模な調査の断片的な資料からみた推測の域をでないものの、弥生時代中期の集落の居住域を遺跡北東部の大津通周辺に営まれた可能性は高いものと考える。

一方、遺跡の南西部の国道19号線・西高蔵交差点周辺では、五本松町11地点第７次調査のSZ13の様な溝状遺構がみつかり、弥生時代中期後葉の方形周溝墓として報告され［㈶荒木集成館編1991］、同地点の16基あるという方形周溝墓の中で最も古い時期の１基と考えられるという。市教委第10次調査１区SD２は、「北西から南東方向に走るように見える」溝状の遺構であり、中期後葉の壺１点が出土する［名古屋市見晴台考古資料館1996b］。遺跡の南東部から南西部にかけては、近年の調査で方形周溝墓が集中してみつかる地域であり、集落の墓域である可能性が高いことが従来から指摘されている。

今回、14次調査におけるSD２は、調査面積内でその全体を検出することができず、その性格は明らかでない。土器棺と思われるSX１の存在や遺物の出土状況から、方形周溝墓の可能性を指摘しておきたい。方形周溝墓とすれば、前述の西高蔵交差点付近からは北へ約250ｍ離れた地点にあたることから、かなり広域な墓域が想定されることになる（註３）。また、名古屋市内では弥生時代中期後半の方形周溝墓は、近年の調査では、正木町遺跡第５次調査のSD１・SD10・P59が溝幅約２ｍ・一辺約12.5ｍの復元される（註４）他、類例は少なく、希少な一例といえる（註５）。

註　1　尾張平野部でいえば朝日遺跡Ⅵ-３期に併行する。（㈶愛知県埋蔵文化財センター1994『朝日遺跡Ⅴ』）
　　2　大参義一　1968「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集ⅩLⅦ　史学16』
　　3　1993年に市教委文化財課（当時、文化課）の立会調査により、14次調査地点より約20ｍ東の地点で、南北方向に走る溝状遺構を検出している。この溝が居住域をとりまく環濠の西端であれば、14次調査地点は居住域外ということになる。
　　4　野口泰子　1996『正木町遺跡　第５次調査の概要』名古屋市教育委員会
　　5　弥生時代中期後葉の土器をまとまって出土する溝状遺構としては、瑞穂遺跡第４次調査のSD11・12・１・３がある。（服部哲也1987『瑞穂遺跡―第４次調査の概要―』名古屋市教育委員会）

第５章　第15次発掘調査の概要

Ⅰ．調査の経過

近年、遺跡推定範囲の西側での調査件数が増加し、弥生時代後期の方形周溝墓や古墳と考えられる溝状遺構が各地点で発見されている。方形周溝墓は、荒木実の調査(1)で16基、南山大学の調査(2)で１基、市教委の第１・４～６・８次調査(3)で計９基が検出されている。古墳は、第４次調査で方墳と円墳の周溝が検出され、その北側での第６次調査で方墳２基と円墳１基の周溝が、第７次調査(4)で方墳の周溝が検出されている(第29図)。一方、住居跡の検出例は少なく、遺跡の東側で、南山大学の調査で数軒の可能性が報告され(5)、荒木の調査(6)で３軒が発見された事例が知られる。

今回の調査は、遺跡推定範囲の西側で沢上中学校の校舎増築に伴い、平成８年８月26日から平成８年９月20日まで実施した。発掘区は、校舎の増築部分のうち建物基礎が埋設される範囲に限定したため、幅約2.5ｍ、全長約36ｍの「コ」字形になり、調査面積は約90㎡であった。

８月26日に東から西へ約40㎝の表土を除去した段階で、黄橙色土（地山）が露出し、東側では包含層が残存しない状態にあった。中央付近から西側で、溝状遺構（SD02･SD05）等の存在が予測され、須恵器や貝殻が出土した。発掘区の西側付近

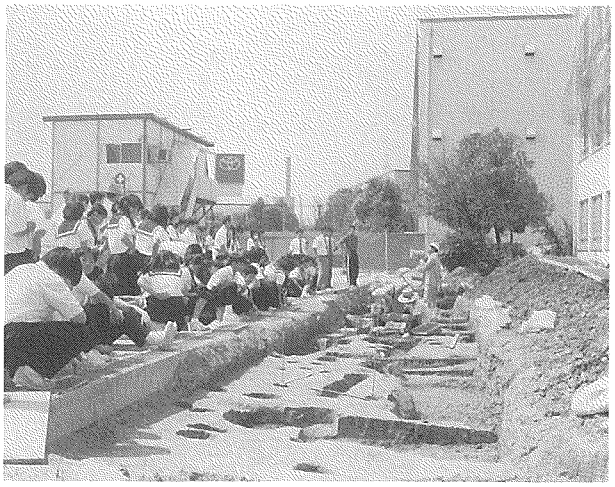
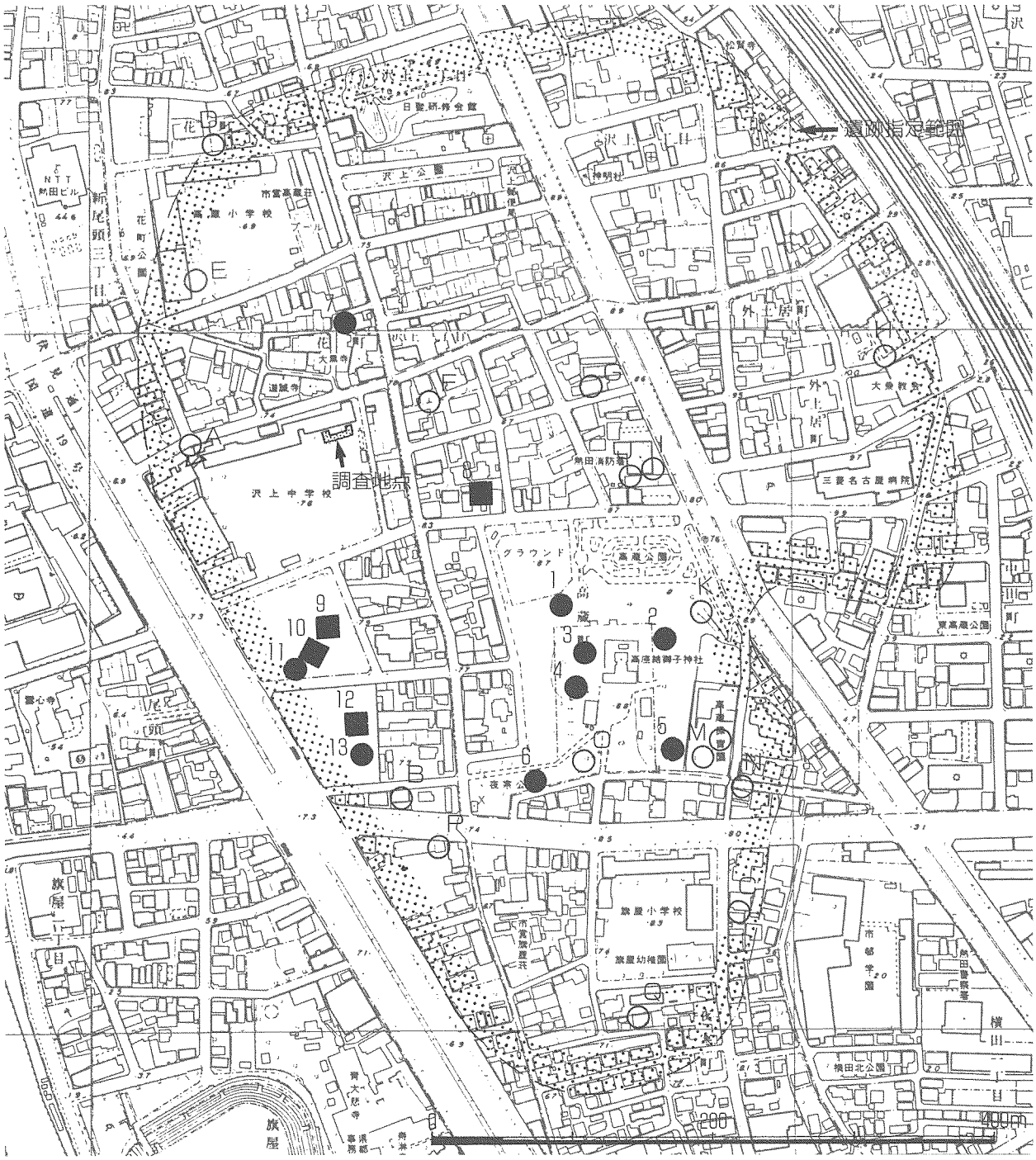


写真43　沢上中学校生徒の遺跡見学会

写真44　SD05　東から

写真45　SD02 付近　西から



第29図　調査地点と周辺の古墳分布図

1　高蔵1号墳	2　高蔵2号墳	3　高蔵3号墳	4　高蔵4号墳
5　高蔵5号墳	6　高蔵6号墳	7　花ノ木古墳	8　方墳(第7次調査)
9　方墳(第6次調査)	10　方墳(第6次調査)	11　円墳(第6次調査)	12　方墳(第4次調査)
13　円墳(第4次調査)			
A　法華塚	B　白山社	C　上人塚	D～G　古塚
H～Q　塚			

(A～G：尾張志付図「熱田」より)
(H～Q：南山大学1979「高蔵貝塚Ⅰ」より)

では、約20cmの表土下に灰色砂質土や褐色砂質土の広がりが残存し、遺物の出土が期待された。

8月30日から9月6日まで、遺構の検出と褐色砂質土や遺構埋土の掘り下げを行い、屈曲する溝状遺構（SD05）等を発見した。包含層と予測された褐色砂質土等は、SD05付近とその西側に広がって確認され、須恵器がSD05の埋土部分から出土した。また、発掘区北壁際に、貝殻の散布があり、貝殻に混じって須恵器が出土した。

10日から13日まで遺構の測量を行い、17日から20日に埋め戻しをして調査を終了した。

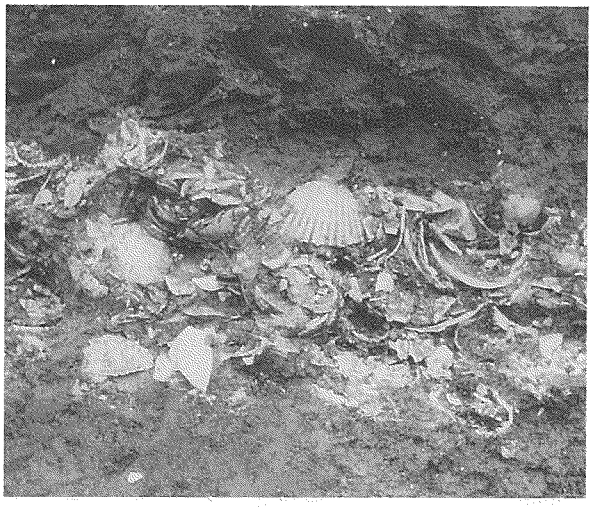


写真46　北壁貝殻

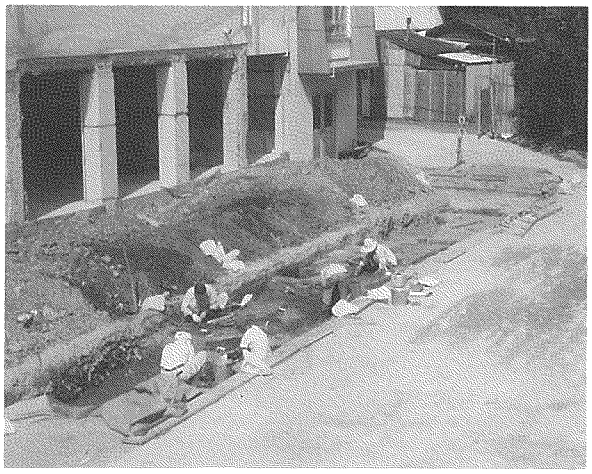


写真47　調査風景　南西から

II．調査の成果

1　層位

発掘の結果は、攪乱された箇所が多く、西側寄り部分に包含層がわずかに残存する状況であった。西側壁南寄りの土層堆積状況は、①表土(約10cm)②灰色砂質土（約10cm）③褐色砂質土（約10cm）④暗褐色土（約5cm）⑤黄橙色土（地山）の順に観察された(第32図)。従来の発掘結果からは、②灰色砂質土③褐色砂質土が主に近代から中世の遺物を、④暗褐色土が主に古代の遺物を含む層位であると予測された。しかし、今回の調査区域では、部分的に残存した②灰色砂質土や③褐色砂質土等から、遺物は採集されていない。また、④暗褐色土は、残存する箇所が調査区西側寄り部分（SD05の付近）に限られ、土の色調も黒色が薄い土層であった。

2　遺物と遺構

遺物は、遺構の埋土（暗褐色土等）中から出土したもので、主に古墳時代土師器や須恵器と奈良・平安時代の須恵器の他に、10世紀頃の広口瓶があり、コンテナ箱に半箱程の出土量であった。埋土が灰色砂質土の小穴も存在したが、中世の遺構と判断できる遺物は出土していない。

遺構は、溝（SD05）や、土坑（SK03)、溝状遺構（SD02)、約70個の小穴が検出された。小穴のうち、遺物が出土したものは4例あり、P9から須恵器破片、P18から土師器破片、P37から須恵器椀、P70からは広口瓶底部が発見された。

SD05（写真44・48～55、第30～33図）

溝は、検出した地山面で、幅約1.8m、深さ約45cmを測り、断面が「船底」形状になる。溝は、ほぼ南方向へ西側が屈曲する形状にあり、東西の外側辺は、約6m以上になり、発掘区外南側へ延びる。ただし、溝の東側には、屈曲する上端部分のような痕跡がわずかに検出されているが、溝の下端の屈曲は検出されず発掘区外へ延びる。溝の埋土（第32図）は、上層が暗褐色土（2層に細分)、下層が褐色土あるいは黄灰

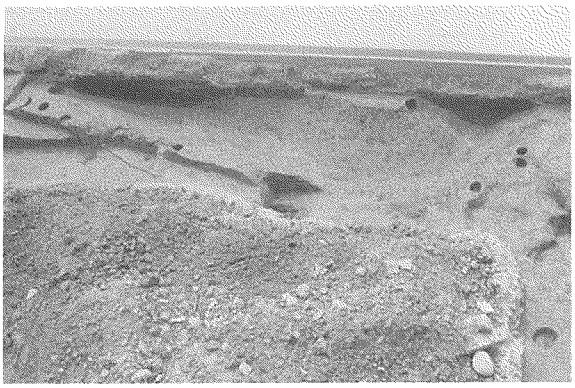


写真48　SD05　北から

写真49　SD05　北西から

褐色土に区別される。遺物は上層から出土し、底部付近で発見できなかった。上層からの遺物は、溝を検出した時点で（写真50）、須恵器甕口縁部（写真51、第30-2図）と須恵器甕上半部（写真52、第30-3図）が出土し、さらにその下から、土師器高坏の脚部（写真53、第30-1図）や、埴輪と推定される破片2点（写真54・55、第33図）が出土した。甕は6世紀前半頃、高坏脚部は4世紀代と思われる。出土の遺物量が少ないため、溝の掘られた時期はあきらかにできないが、溝は6世紀前半頃に50cm程は埋っていたものと考えられる。埴輪片と推定される2点は、1つは残存部分の短辺約5cm長辺約8cm厚み約1cmの偏平で焼成がもろいもので、他の1つは、4～5cmのもので縦ハケ後に横ハケ沈線が鮮明に観察される焼成が良いもので、色調はともに淡黄褐色である。前者は、断面に粘土つなぎの剝がれ痕と考えられる部分が観

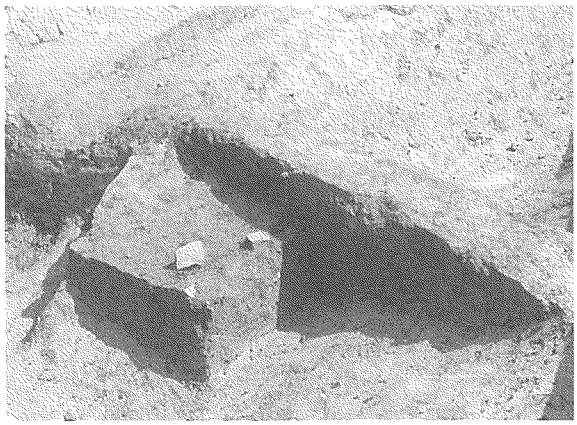
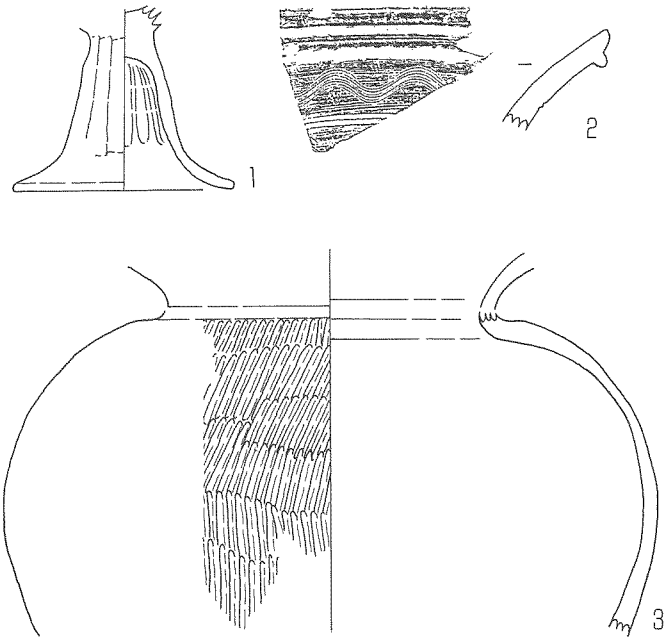


写真50　SD05 須恵器甕出土状況　西から



第30図　SD05 出土遺物　(1/3)

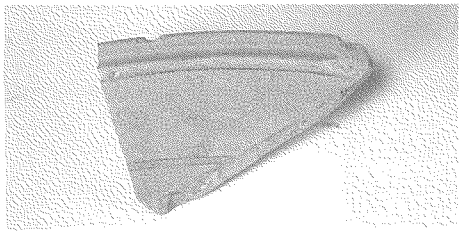


写真51　須恵器甕口縁部

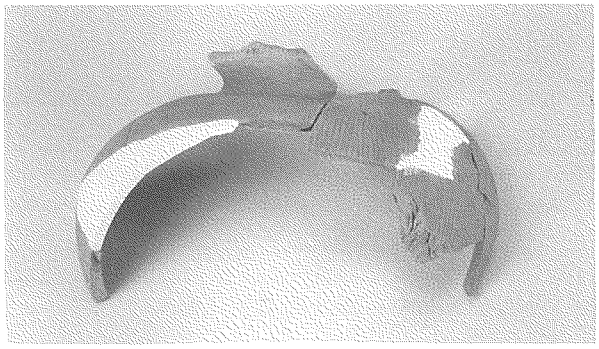
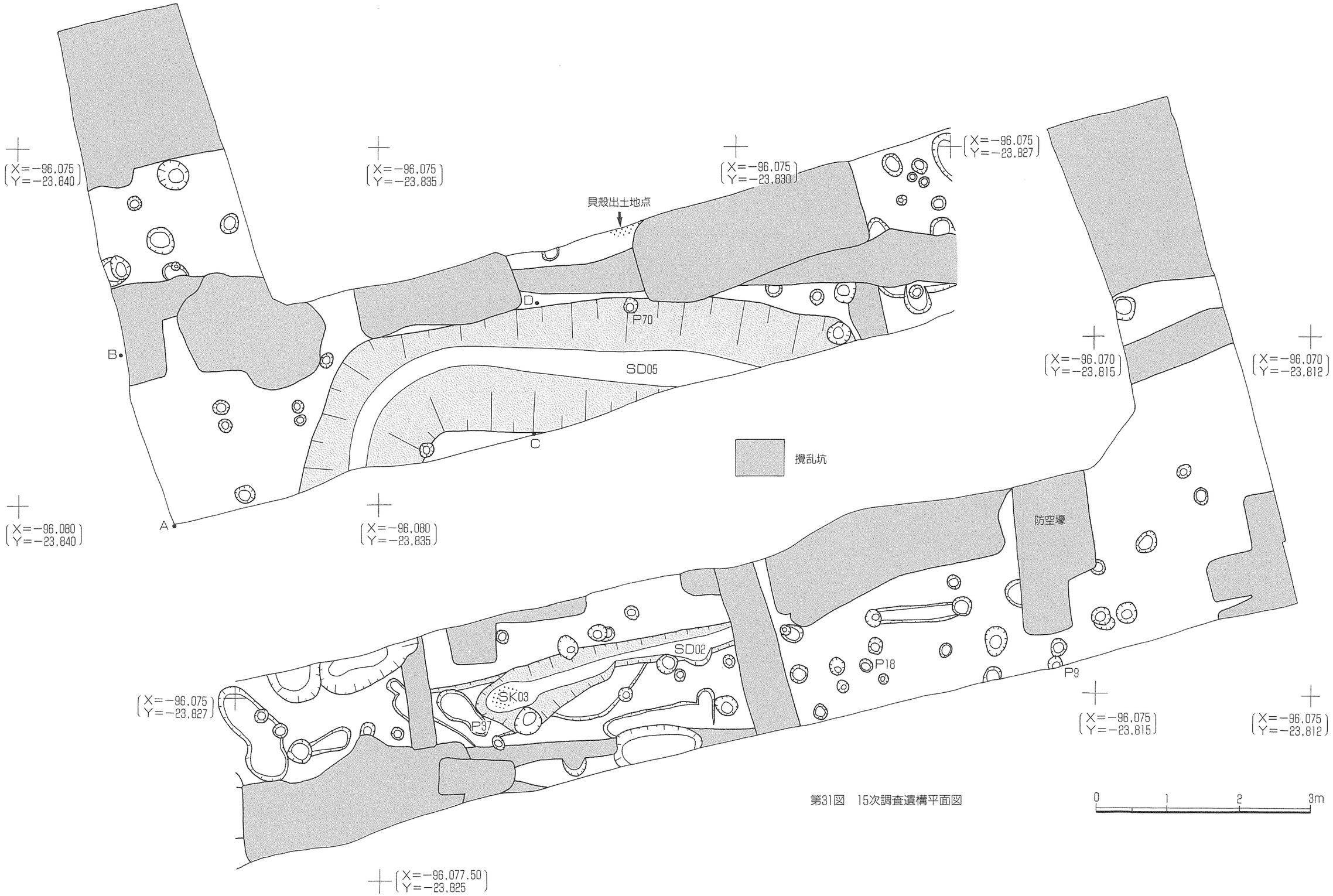
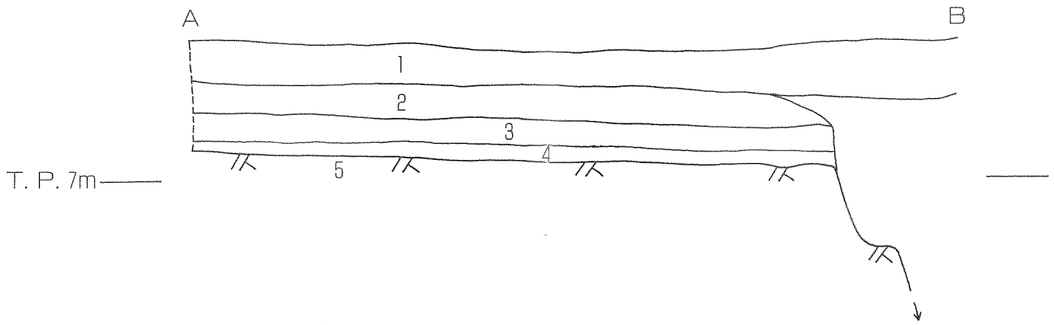


写真52　須恵器甕上半部

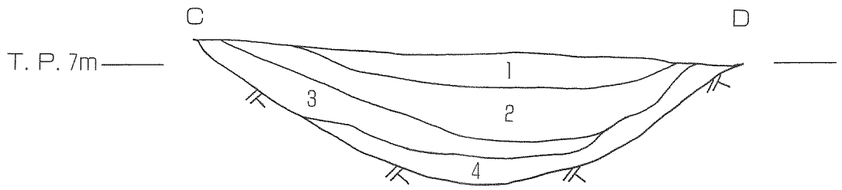


第31図　15次調査遺構平面図



発掘区西壁土層註

1　表土
2　灰色砂質土
3　褐色砂質土
4　暗褐色土(シルト質)
5　黄橙色土(地山)



SD05埋土土層註

1　暗褐色土(シルト質で、1～3㎜の地山粒を少量含む。)
2　暗褐色土(1より、色調が黒く砂質で、2～5㎜の黒褐色土・褐色土・灰色土・地山の粒が混じり合う。1～5㎜の礫粒を少量含む。)
3　褐色土(砂質で、1～3㎜の地山粒と沈着の鉄分を含む。)
4　黄灰褐色土(シルト質、2～5㎜の灰褐色土・黄褐色土が混じり合う。)

第32図　土層断面図(発掘区西壁・SD05)

察され、形象埴輪の一部の可能性もあり得る。また、後者は、内湾する形状で、朝顔型円筒埴輪の頸部の一部の可能性もあり得る。高坏脚部は、付け根部を絞り成形した後に、その内面がナデ調整され、裾部はなだらか外反するもので、表面は柔らかくもろいため調整痕が観察できない。時期は、「松河戸II式」頃と思われる。

写真53　高杯脚部

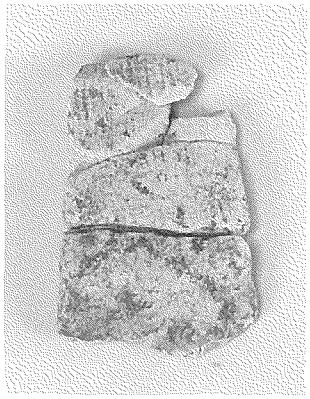


写真54　埴輪片

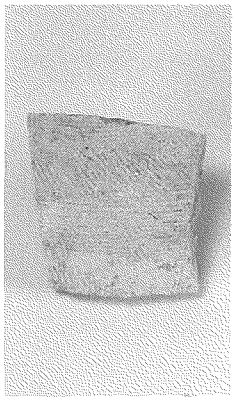
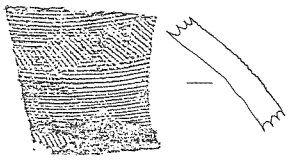


写真55　埴輪片



第33図　埴輪片　(1/3)

SD02（写真44・57）

最大幅約40cm、深さ約10～15cmで、ほぼ東西方向に3ｍ程が検出されている。西側隅は、SK03やピットが重複し、東側は、水道管埋設の攪乱で跡切れる。埋土は、暗褐色土で色調が褐色が濃いもので、検出面（地山）の高さ付近での埋土から須恵器瓶（写真57）と思われるものが出土した。SK03との切り合い（前後関係）は、その埋土に若干の差があり、SK03の貝の分布状況からは、SK03が、SD02の後に掘り込まれたよ

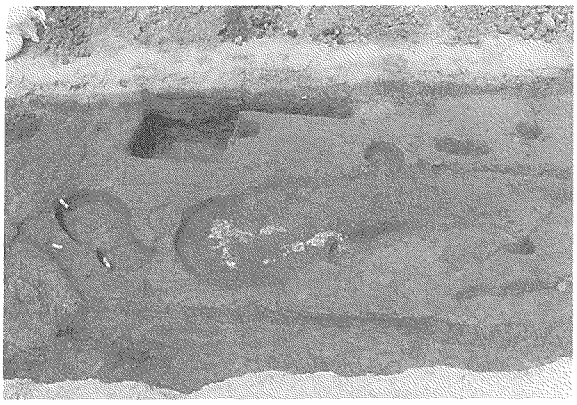


写真56　SD02・SK03　南から

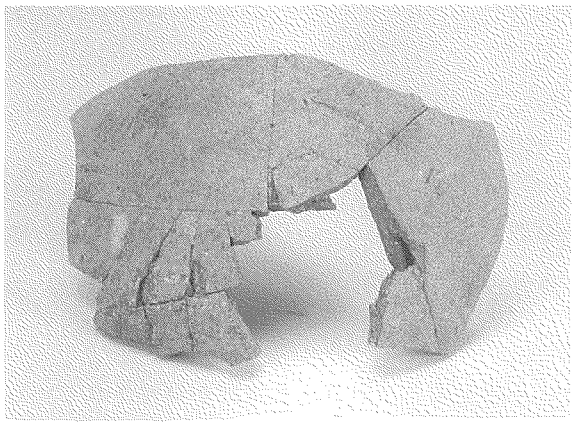


写真57　SD02出土須恵器瓶

写真58　発掘区全景　北東から

うにも見えたが、断定できなかった。

SK03（写真59・60）

短辺（南北）が約80cmで深さ約30cmで、下端の最終形状から推測する長辺（東西）が２ｍ程の楕円形状の土坑である。貝の分布は、ほぼ西側より１ｍの範囲内に集中し、暗褐色土（砂質）に混じっていた。埋土中から遺物は発見されていない。

写真59　SK03 調査風景

写真60　SK03 埋土断面　北東から

第34図　P37 出土遺物　(1/3)

P37（写真61・第34図）

径約20～30cm、深さ約10cmの穴で、最終の形状が北西のP36と接して「瓢箪」形状になった。埋土は、暗褐色土で、埋土から椀が出土した。椀は、口縁端部がやや外反し、底部から口縁部にかけてやや深めに曲り、底部が糸切り後にヘラ削り調整がされる。口径が約12.5cmで、高さが約４cmの大きさを測る。８世紀後半頃のものと思われる。

写真61　椀

P70（写真62）

径20cm、深さ約30cmの穴で、埋土は暗褐色土（砂質）で色調はやや灰色が濃いものであった。広口瓶の底部片残存高約４cmが出土した。底部推定の径は、10.5cm程になり、底部の高台付近まで灰釉が付着している。10世紀頃のものと思われる。

写真62　広口瓶底部

その他

(1)貝層　調査区の北側壁で、貝の堆積が観察された。貝層は、付近が攪乱されていたために、土層断面での確認しかできていない（写真63）。土層断面の観察から、貝殻は、部分的に残存した暗褐色土を掘り込む土坑の埋土中に混じるものと思われる。貝殻に混じって、８世紀頃の台付盤の台部破片（写真64）が出土した。

(2)防空壕　全体の形状を確認できず、未掘であるが、おそらく防空壕と判断される遺構が発見されている。沢上中学校創立以前には民家が並び、その敷地内で戦時中に使用されたものと推測される。

写真63　北壁(貝層)断面

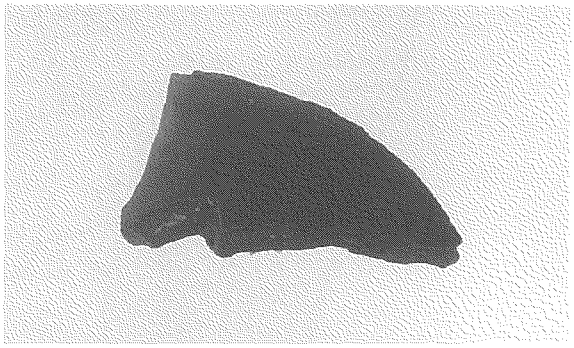


写真64　台付盤台部

Ⅲ．小　結

今回の調査で、方墳と推定される溝状遺構（SD05）の一部を発見した。

この溝を方墳の周溝と推定する根拠は、溝の屈曲する形状が墳墓の周溝に類似することである。また、溝の埋土から埴輪と憶測できる破片が出土したこと。一方、溝の東側の屈曲する上端部分のような痕跡がわずかに検出されているが、この上端から推定する東西の外側辺は約６ｍになり、大きさからすれば、方形周溝墓の可能性もありうる。しかし、包含層や溝から弥生土器が発見されていないこと。さらに、この地点の周辺でも古墳の存在が、古絵図(尾張志付図「熱田」)(7)や、第４・第６・第７次調査地点での調査結果から推測されつつあること。こうした傍証からも、溝状遺構（SD05）が、方墳の北側周溝部分の可能性があると推定する。この地点が、包含層の残存状態が良くないことを考慮しても、弥生土器が発見されていなく、包含層の色調も黒みが薄いため、この地点あたりは居住域でなく墓域であったと推定される。

周辺の古墳は、花ノ木古墳の他、近年の調査から、推測される個数が増えつつある。調査地点の約100ｍ西方で古絵図にある「法華塚」は、戦前まで「法華堂」の位置に在り、明治の「地籍図」との照合からも、南側に方形部がある前方後円墳の可能性が推測されている(8)。この付近での区画整理事業の前後の状況(第35図）からも「法華堂」の位置が判る。また、南方へ約300ｍ離れた古絵図にある「白山社」は、円墳の可能性もある(9)。その東方約100ｍの高蔵６号墳は、その南側に前方部がある前方後円墳の可能性も推測されている(10)。また、第４次調査地点では、方墳と円墳が(11)、第６次調査地点では、５世紀後半の方墳２基と５世紀末の円墳１基が(12)、第７次調査地点では、５世紀中葉から６世紀前葉までの時期とされる埴輪が出土する溝が(13)発見されている。これらの古墳の存在から、今回の調査地点周囲にも、複数の古墳が存在した可能性が極めて高いと考える。

この地域での近代以降の宅地化が、古墳の盛土や主体部を削平したものの、今後の調査で残存する周溝が発見され、古墳の数がさらに増える可能性があると思われる。

また、今回の調査地点では、溝（SD02）や穴（P37）から８世紀後半頃の須恵器が出土し、この時期頃のものと推測される貝殻散布も発見された。発見した貝殻は、土坑（SK03）と発掘区北壁の２箇所で、小規模な堆積であった。中学校地内での貝殻散布は、これまでにも、２地点で確認されている。現在の「更衣室」と「正門」付近の工事で、前者は1982年の試掘調査で溝の埋土から(14)、後者は1995年の工事中に量的にもかなり多い状態のものが出土したという(15)。貝殻に伴う出土遺物が少なく、貝殻投棄の時期は確定できないものの、発掘区北壁貝層から共伴した台付盤から推測すれば、おそらく８世紀頃には、この周辺で居住が営まれていた証であると考えられる。

第35図　区画整理前後の状況と「法華塚」等の位置図（濃い線は整理前の道・町界）　名古屋市計画局『戦災復興誌』より

註

1　荒木　実　1986『名古屋市高蔵遺跡五本松町11発掘調査報告書』五大産業株式会社
　荒木　実　1987『名古屋市高蔵遺跡五本松町11第２，３次発掘調査報告書』国際興建開発コンサルタント株式会社
　荒木　実　1991『名古屋市高蔵遺跡五本松町11第４，５，６，７次発掘調査報告書』株式会社ユニオン
2　高蔵遺跡夜寒地区調査会『熱田区夜寒町　高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XX
3　名古屋市見晴台考古資料館　1982『高蔵遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
　名古屋市見晴台考古資料館　1990『高蔵遺跡―第４次調査の概要―』名古屋市教育委員会
　名古屋市見晴台考古資料館　1994『高蔵遺跡―第５次調査の概要―』名古屋市教育委員会
　名古屋市見晴台考古資料館　1995『高蔵遺跡―第６次調査の概要―』名古屋市教育委員会
　名古屋市教育委員会　1996『高蔵遺跡（第８次）』埋蔵文化財報告書25
4　名古屋市教育委員会　1995『高蔵遺跡（第７次）発掘調査報告書』
5　南山大学人類学博物館　1979『高蔵貝塚Ⅰ』南山大学博物館紀要第１号
　南山大学人類学博物館　1985『高蔵貝塚Ⅱ』南山大学博物館紀要第７号
6　荒木　実　1989『名古屋市高蔵遺跡沢上二丁目501発掘調査報告書』川島商事株式会社
7　小田切春江　天保年間（1930～44）写『尾張志付図「熱田」』名古屋市蓬左文庫所蔵
8　名古屋市見晴台考古資料館　1990『高蔵遺跡―第４次調査の概要―』名古屋市教育委員会　Ｐ９
9　註８　P10
10　夜寒町遺跡調査会　1988『高蔵（夜寒町102番地）遺跡調査報告書』P38
11　註８
12　名古屋市見晴台考古資料館　1995『高蔵遺跡―第６次調査の概要―』名古屋市教育委員会
13　註４　P72
14　名古屋市見晴台考古資料館　1983『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
15　沢上中学校教頭黒川稔氏から、ご教示を得た。

主要参考文献

伊藤秋男編1979『高蔵貝塚Ⅰ—1953年D地点第1次発掘調査—』南山大学人類学博物館

鍵谷徳三郎1908「尾張熱田高倉貝塚實査」『東京人類學會雑誌』第23巻第266号

鍵谷徳三郎1908「尾張熱田高倉貝塚實査」『考古界』第7篇第2号

清野謙次1925「尾張國名古屋市熱田貝塚」『日本原人の研究』岡書院

清野謙次1969「名古屋市熱田高蔵神社北方貝塚」『日本貝塚の研究』

㈶荒木集成館編1986『名古屋市高蔵遺跡五本松町発掘調査概要報告書』五大産業株式会社

㈶荒木集成館編1987『名古屋市高蔵遺跡五本松町第2，3次発掘調査概要報告書』国際興建開発コンサルタント株式会社

㈶荒木集成館編1989『名古屋市高蔵遺跡沢上二丁目501発掘調査報告書』川島商事株式会社

㈶荒木集成館編1991『名古屋市高蔵遺跡五本松町第4，5，6，7次発掘調査概要報告書』株式会社ユニオン

酒詰仲男1967『貝塚に学ぶ』学生社

佐藤龜一1918「尾張國熱田の貝塚より得たる日本石器時代人骨に就いて」『東京人類學會雑誌』第33巻第11号

杉山壽榮男1930「愛知縣熱田貝塚出土の彌生式土器」『史前學雑誌』第2巻第2号

澄田正一1955「愛知県名古屋市高蔵貝塚」『日本考古学年報』4

高蔵遺跡（花町地区）調査会編1994『高蔵遺跡（花町地区）発掘調査報告書』高蔵遺跡（花町地区）調査会

高橋健自1908「熱田貝塚の發見につきて」『考古界』第7篇第1号

田中稔編1954『高倉貝塚』豊橋市瓜郷遺跡調査会

鳥居龍蔵1925「熱田貝塚より發見せる馬骨」『有史以前の日本』

中山英司1956「愛知県名古屋市熱田区高蔵貝塚」『日本考古学年報』6

名古屋市見晴台考古資料館編1982『熱田区高蔵町高蔵遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1983「熱田区夜寒町所在高蔵遺跡発掘調査概要報告書」
『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1988『熱田区五本松町高蔵遺跡第3次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1990『高蔵遺跡—第4次調査の概要—』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1994『高蔵遺跡第5次調査の概要』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1995a『高蔵遺跡第6次調査の概要』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1995b『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1996a「高蔵遺跡(第8・9次)」『埋蔵文化財調査報告書25』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1996b『高蔵遺跡第10次調査の概要』名古屋市教育委員会

名古屋市見晴台考古資料館編1996c『高蔵遺跡第11次発掘調査の概要』名古屋市教育委員会

楢崎彰一1955「名古屋市熱田区高蔵第Ⅰ號墳の調査」『名古屋大学文学部研究論集Ⅺ　史学4』名古屋大学文学部

南山大学人類学博物館編1982『高蔵貝塚—春日荘跡地区発掘調査報告書』高蔵遺跡調査会

南山大学人類学博物館編1985『高蔵貝塚Ⅱ—1956年D地点第2次発掘調査』南山大学人類学博物館

南山大学人類学博物館編1988『高蔵貝塚Ⅲ—1985年度夜寒地区発掘調査—』南山大学人類学博物館

長谷部言人1925「石器時代の馬に關して」『人類學會雑誌』第40巻第4号

長谷部言人1940「熱田貝塚からの馬の左掌骨」『人類學會雑誌』第55巻第5号

夜寒町遺跡調査会編1988「高蔵(夜寒町102番地）遺跡調査報告」『古代人』49　名古屋考古学会

名古屋市文化財調査報告　既刊目録

I	H-101号古窯跡発掘調査報告	1973	品切
II	古沢町遺跡発掘調査報告　―弥生時代編―	1974	〃
III	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974	〃
IV	有松町並み調査報告	1975	〃
V	NK134号古窯跡発掘調査報告	1975	〃
VI	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在 埋蔵文化財発掘調査報告書	1976	〃
VII	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1979	〃
VIII	小幡古墳発掘調査報告書	1980	〃
IX	NN-278号古窯跡発掘調査報告書	1981	〃
X	名古屋市内の山車と神楽 民俗文化財調査報告書	1981	在庫
XI	NN-314号古窯跡発掘調査報告書	1981	品切
XII	NN-282号古窯跡発掘調査報告書	1982	在庫
XIII	NN-268号古窯跡発掘調査報告書	1983	〃
XIV	笹ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984	〃
XV	名古屋の石造物	1983	品切
XVI	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985	在庫
XVII	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985	〃
XVIII	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986	〃
XIX	吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986	〃
XX	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987	〃
21	白鳥古墳第II次発掘調査報告書	1989	〃
22	名古屋市守山区志段味地区民俗調査報告書	1989	〃
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990	〃
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993	〃
25	鳴海地区須恵器窯跡発掘調査報告書	1994	〃
26	名古屋市山車調査報告書 1（筒井町湯取車）	1994	〃
27	NN330号窯発掘調査報告書	1994	〃
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994	〃
29	名古屋市山車調査報告書 2（若宮まつり福禄寿車）	1995	〃
30	名古屋市山車調査報告書 3（牛立天王まつり牛頭天王車）	1996	〃
31	埋蔵文化財調査報告書24	1996	〃
32	埋蔵文化財調査報告書25	1996	〃
33	名古屋市山車調査報告書 4 （有松まつり布袋車　唐子車　神功皇后車）	1997	〃
34	埋蔵文化財調査報告書26	1997	新刊

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書26
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告34
編著者名	山田鉱一・水野裕之・木村有作・田原和美
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457　愛知県名古屋市南区見晴町47番地　TEL（052）823－3200
発行年月日	西暦1997年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
高蔵遺跡（たかくらいせき）	名古屋市熱田区（なごやしあつたく） 五本松町（ごほんまつちょう）909－3	23100	12－2	35度 07分 52秒	136度 54分 21秒	1996.4.22～ 1996.5.31	240m²	店舗付 共同住宅
	名古屋市熱田区（なごやしあつたく） 五本松町（ごほんまつちょう）909－4					1996.5.13～ 1996.6.7	190m²	個人住宅
	名古屋市熱田区（なごやしあつたく） 高蔵町（たかくらちょう）５番18号			35度 08分 00秒	136度 54分 24秒	1996.7.22～ 1996.8.9	90m²	個人住宅
	名古屋市熱田区（なごやしあつたく） 五本松町（ごほんまつちょう）４－４			35度 08分 10秒	136度 54分 19秒	1996.8.26～ 1996.9.20	90m²	学校校舎

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高蔵遺跡	集落跡	中世	溝	山茶碗、中世陶器	第12次調査
		中世・近世	溝	山茶碗、近世陶器	第13次調査
		弥生	溝	弥生土器	第14次調査
		古墳・古代	溝	６～８世紀須恵器	第15次調査

名古屋市文化財調査報告34

埋蔵文化財調査報告書26

1997年３月25日

編集　名古屋市教育委員会

発行　名古屋市教育委員会

名古屋市中区三の丸三丁目１番１号

印刷　株式会社 クイックス